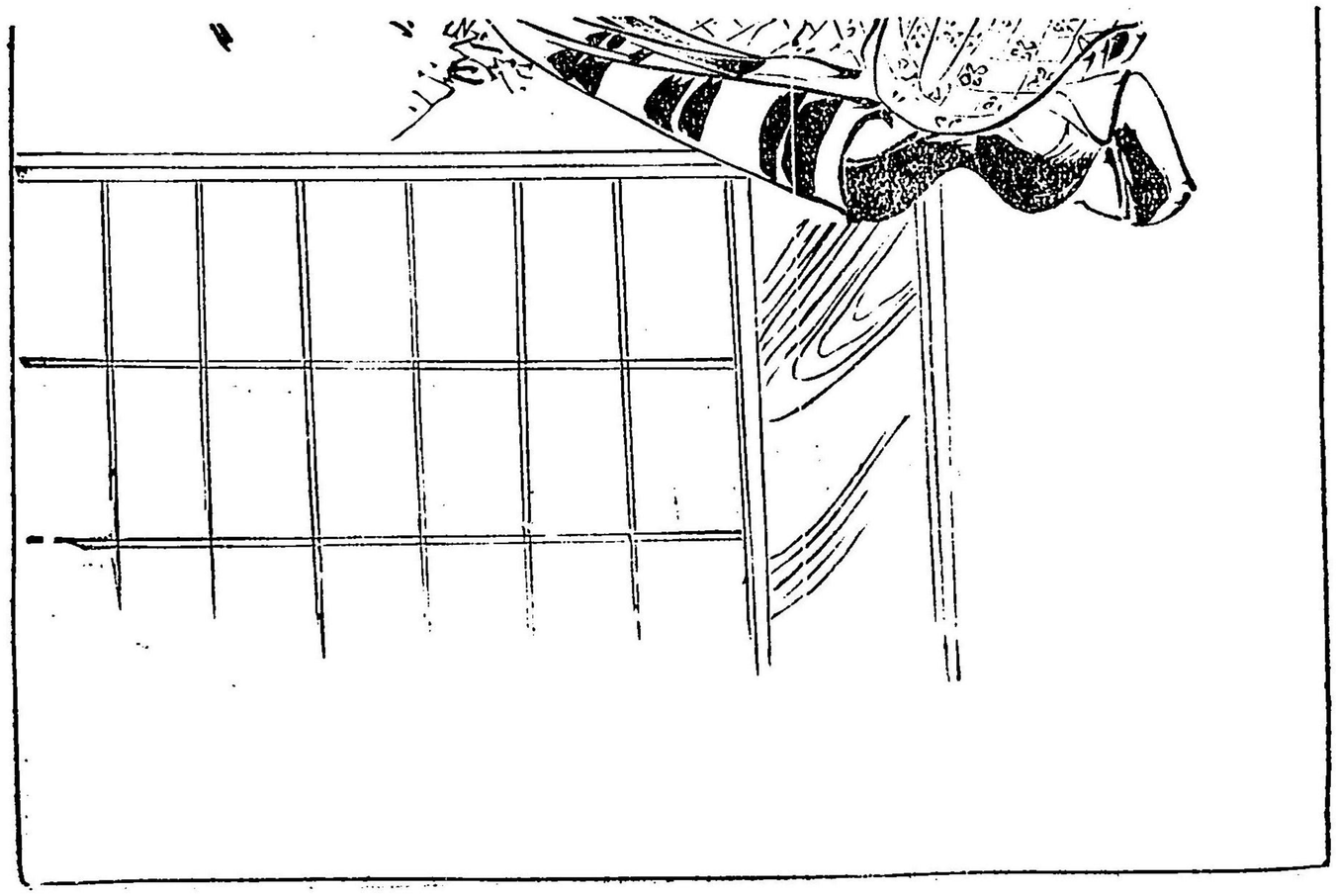
5421

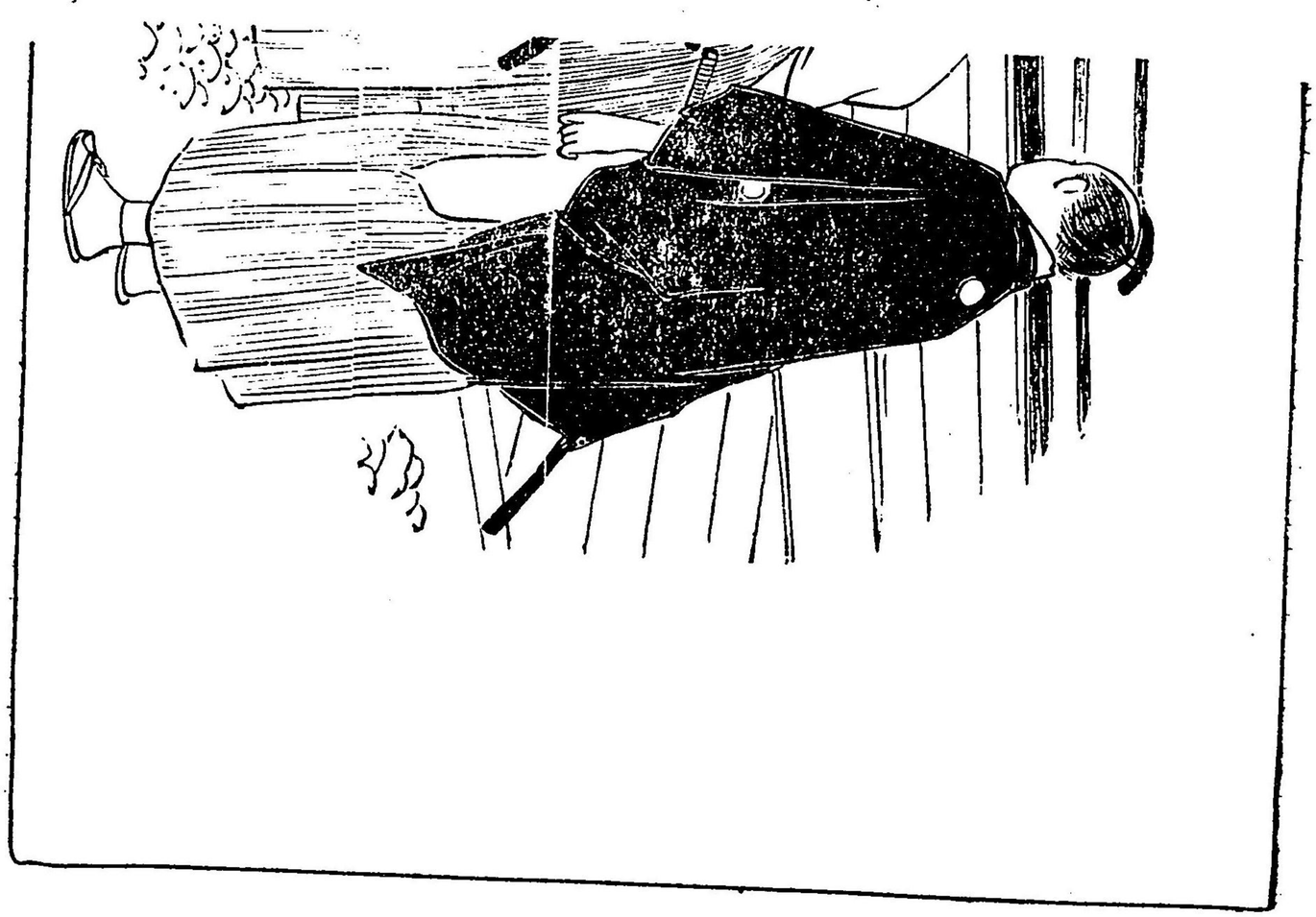
俠客實傳

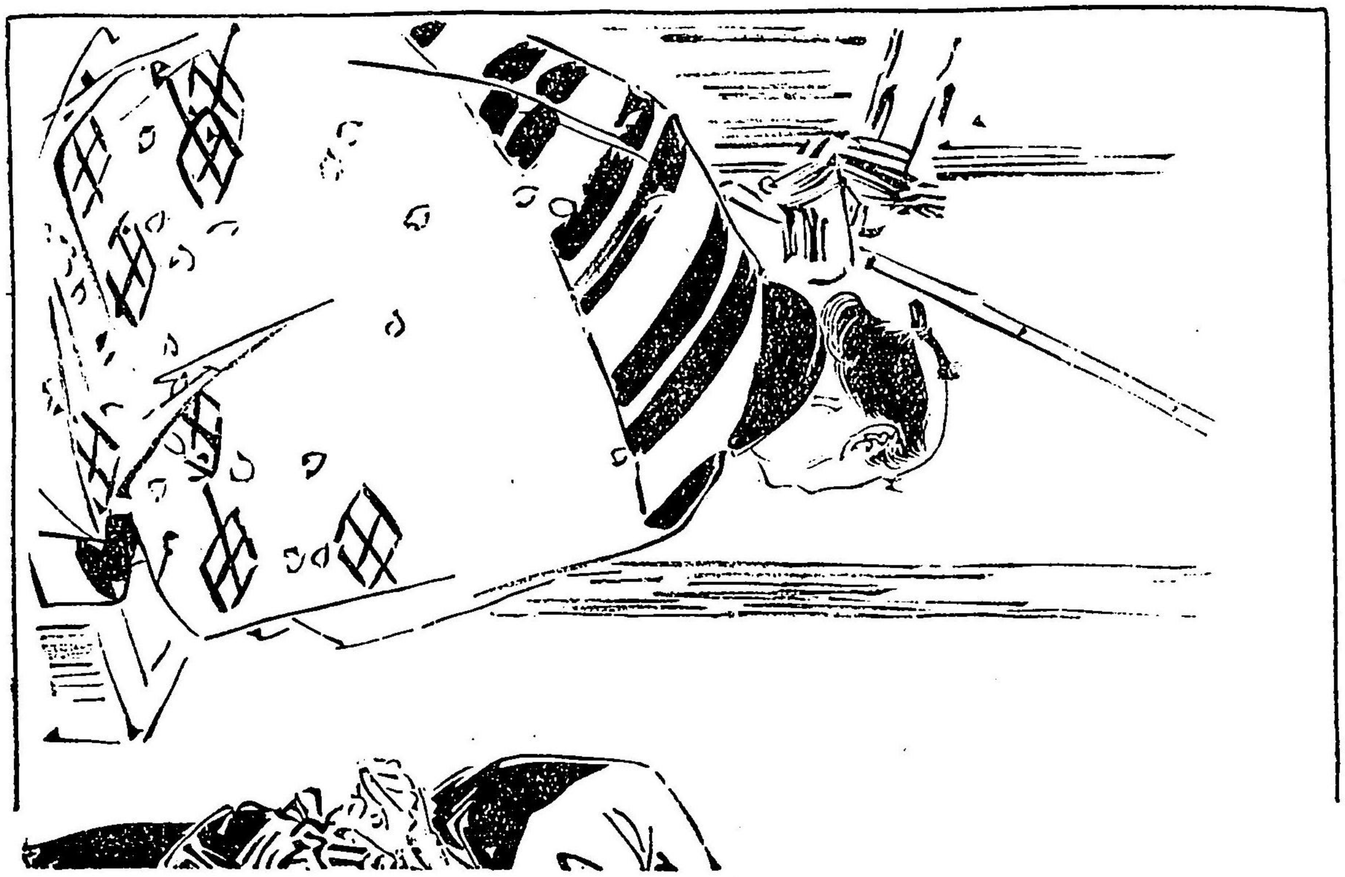
烏有山人 著

斷金

東京 金陵堂 藏版







俠客實傳 斷食堂

第一回

烏有山人編

戰塵を煽りし徳川五本骨の金扇に、あふぎ出すや太平の春風、御代は千代田の松の聲も、万歳の響を傳へ、朝日に向ふ葵の御紋、三葉と重なる寛永の初年となりては、世はいつか華車風流の嗜好に耽り、老幾が寐物語に聽なれし、元龜天正の血の雨を、花に恨むか春雨の徒然の窓の折節に、謡ふ小唄の一曲も三河訛の鄙びを脱けて浮たる調子を喜こぶ世の樣さて慨嘆はしと白髮の老武者樣を叩いて嘆けるは、

されど亂世の名殘全く消えやらず、何處やらに昔のゆゑ當年の

339
341

俠客實傳

斷食堂

烏有山人編

第一回

戰塵を煽りし德川五本骨の金扇に、あふぎ出すや太平の春風、御代は千代田の松の聲も、万歳の樂を傳へ、朝日に向ふ葵の御紋、三葉と重なる寛永の初年となりては、世はいつか華車風流の嗜好に耽り老爺が寐物語に聽なれし、元龜天正の血の雨を、花に恨むか春雨の徒然の窓の折節に、謠ふ小唄の一曲も三河訛の鄙びを脫けて、浮た調子を喜こぶ世の樣、さて慨嘆はしと白髮の老武者膝を叩いて嘆じける。

されど亂世の名殘全く消えやらず、何處やらにほのめく當年の朝

氣、祖先が數度の劍を潛つて、槍玉に揚し若干の石高、米一粒も思へば、これも血汐の紀念、難有き大恩忘れて喰ふ白痴者、素破戰といふ時あらば、諸に細き喉元張裂るはど叫ぶとて、三軍の號令よもならうか、小鼓打鳴したその指先に、三尺の大刀は何として掴まれう、たとへ華車ぢや優美ぢやとて、其のへろ〳〵腰見たうもない、伊達には差ぬ腰の細身、それでは犬も覺束なし、あな頼母しからぬ士風の頽れやと、羅を組で市中を横行し、弱を扶け强を挫く伊達衆といふ者出來りて、香ばしき俠骨大江戸の一名物となり、花は櫻木人は何とやらと、武士の外に世上に歌はれぬ。

町人に伊達者あれば貧ず嫉ひの三河根性、こも劣らじの氣込勇ましく、神祇組柔組等の名も嚴めしく、歴々の旗本堂々の公達なんど我から好む無反の大刀に、衣裳の綺羅をつくして、物見遊山の場所

に立廻り、ともすれば刀の鞘當、袖の摺合も多少の緣とはならず、結ぶ恨みの血の雨に、町人の膽吐を拔て何事ぞ花見る人の長刀と呶たしむるに至りしぞ詮なき。

世は元和となり寛永と遷り、年の號は變れども變らぬは代の榮ね元和の七年には秀忠公姫君入内して女御とならせ給ひ、時めきたまふさへ目出度限りなるに、同九年には秀忠公家光公上洛ありて雲井の御覺ねも此上なう目出度、種々の調度なんど賜はりしものから、かねて情を損ねたる京江戸の民も、共に歡こびの聲を擧げて

ろの睦びはあはれ徳川の御代万々歳と壽かぬ者もなく、武士の勢ひは猛れる鷲の羽ふきに伏ざるもあらざる中に、强て楯突く不思議の男、武士を惜むこと毛虫よりも甚はだしく、ことあれば我から進むで命の棄場尋ぬれど、幸はひに毛筋の疵もなき三十男、あた

ら不用の身を撫し、春風に吹き老るを嘆じぬ、一怪物名を夢の市郎兵衛といふ。

呼ば集さらん六百の乾分、三寸の指の向方には、百年の壽命喜こんで縮め、笑つて水火にも飛込んづ腹心の乾分小百人、推も推されもせぬ天晴見上る男一貫俠客の中の俠客と歌はれて、其の名大江戸に鳴り響くことはたゝく雷のやうに、泣子とゃむる威名瓦燒く今戸の爺も聞傳へて恐れける。

頃は寛永の二年、そよ吹く春風腥ぐさき氣もぬけて、血に痩し花は昔を忍ぶか岡に、東叡山寛永寺新たに建立あり、植ゑ增す花の千株に、京は嵐山の面影を此處で見らるゝ果報も永壽の命甲斐、南無や觀音の參詣終りて、上野に向ふ老若男女引も切ぬ廣小路を、他目美

やさしく、手を引合て行く男の方は、丈拔群の骨柄勇ましく引添ふ女はまだ十八か、纖腰は細き小松葉の小袖着て、後れ勝なる足も疲氣に、小走りの姿しはらしく、人に逆上て紅潮したる頰の邊りに憎や春風に吹るゝはつれ毛の二筋三筋、故意とならぬ風情見かへる者は足を停めて春は浮立心も空なるべし。

第二回

松檜杉の群立、こゝ一區の深山を見せて、所がら鳴く鳥の音も世には似ず、梢の嵐靜寂の氣を澄し、梵唄の音も塵に穢れぬ一閑境、雲の上野も春といへば、人は雲霞を引く繩に、掛つらねたる小袖寫紅紫のいろ〳〵に、梢の花に照映て、下にも織や唐錦げに大江戸の花の春あな美しと在郷の媼も呆れのたつか弓、はるの風情を集めたる

清水堂の後の方、張廻らせし花見幕、去し戰場に野陣の狀、忍ぶかたは武士の主從、旗本の忍びの遊山と見えぬ。

一座の主と覺しきは三十餘の年齢、目眥鋭く人を射りて、剃立の髭の跡青々と頤を隈取、一餅ありげの面魂、武士は大杯グッと呑干て下手に控へたる大男に擬し「こりや仁王、毎時にない改たまりやう、春は浮立んでは面白うないわ、此杯美事乾て、願に下へ廻しやれい」仁王と呼ばるゝ大男は、愛想の笑顔少し洟へて、難有げに杯推戴き「これは勿体ない盃、仁王奴難有く頂戴いたします」一口飲で下に置く、武士はやゝと推留め「何ぢや仁王、たかゝ其小盃、美事飲乾いでがな、一息に乾して退早う次へ廻線ぢや」仁王は朱盃のやうに赤うなりたる面、一撫なでつ「殿、うれは御無理、大分參つて面はかくの通り、殿の御前、過爲出來さうも知れませねば、此上は平に御免

を」小供のやうに平伏て詫まり入ば武士は機嫌の高笑「あはゝ弱いな仁王宜し其盃は免す程に、汝や小唄が妙ぢやと聞く、是非に所望ぢや、歌ふて聞せい、酒席の遠慮は無用にせい、それ平吾、仁王に唄を歌はせい」武士の言葉に二三人、仁王の傍に立かゝりて「これ仁王何したもの、殿の仰せ餅みやるな、其後込は近頃卑怯と申すものぢや」仁王は益々當惑の顏色武士は愈々興がりて「あはゝゝ、仁王何した者ぢや、さゝかう待つて何故歌はぬ「殿、う、それは全たくの御無体、土俵の上では負を取らぬ此仁王奴も遊藝にかけては大の不器用、隙し藝なんぞゝは存じもよらぬ、何人からお聽なされましたな「いや左樣は遁さぬ、誰が云はうか恨まいでもぢや、したが土俵では負を取らぬと今申したが、客冬明石の、勝負は何ぢや、ありや何と見ても勝たとは受取られぬ、うれに又もや見苦しい其態

皆の手前、意地にも一つ歌ふて見い」仁王は有繋に頭を垂て辱を忍ぶ狀「や、そのこと仰せ出されては、無念心根に徹しまする、勝負は時の運不運、あの節は怪我の負、いつかは彼奴に思ふさま砂舐らせて、殿のお顏も起す存念、眞以て……」と語もつゝかぬ笑止の体、武士はわざとらしく笑ひに消して「いや仁王、今のは坐興ぢや、心に懸て耻るに足らぬわ、何はともあれ其杯、不用ば次へ廻した上、前にいふた小唄とやらは、歌はいでは濟さぬぞ」今は辭み切れぬ顏付可笑く、搾り出したる濁聲高く、歌ふ小歌の一節は、芝垣芝垣越に、雪の振袖ちら〳〵と見た」犬の遠吠にも似たらん無類の拙なさ、顏を顰めて歌も折しも、暮近き春の夕風、張幕の裾を煽つて、ちらと見ゐたる眞美人の影、彼武士は目敏く見留けん、衝と起て幕を揚げ、外面の方を眺め入りしが、顧て後を見返りて「皆の者、我に續け」と云ひ

樂さを、幕の外に立出れば、何事の起れるやらんと、解かぬる坐上の六人、いづれも外へと出立たり、幕はた〳〵と淋しく煽つて、數ふるばかり班に散りかゝる花の數片。

第三回

いはるゝ儘に後には附隨がへを、まだ何事とも解ぬ仁王、武士の袂を少し扣へて、「殿、何事の出來ました、何を俄かに思立ぢ」ひろめる問へは、武士は輕く點頭つ、顏さし寄て密々と、何か仁王に呟やき絶て行過し美人の後影を指せば、仁王は呢と見送りしが、周章しく武士に對ひ「殿には又、あの女に附添ふ男を誰と御覽ずる、慥かに明石と見申した、さては女は許、勅の妹の光江、これは殿……」と武士を見上げて莞爾と笑ふ心の一時始めて氣付く此方も力付きたらん、

が如く「フム、いかさま彼奴は明石志賀之助ぢや、ほゝこりや面白いわ、仁王いつぢやの意趣晴、濟りなう懸つたぞ」互に謀し合て六人の影は、早くも木隠に隠入りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一本盛の花の木陰、置並べし床几に客漸やう淋れ、夕映の色一入照りまさる風情に見惚て、浮かり見入る後の方「これ媼、茶を一つ振舞てくれ」惚いて見かへれば、床几にかゝる立派な男、少し隔れて妹とも見ゆる美人は前の二人なり「これは能うぞれ越、今日は誠と好いお日和、結構な花見にござります」愛想と共に媼が汲むも時にあひたる櫻の湯、暮るゝ梢に來て騒ぐ小鳥の羽ぶきにちら〳〵と、亂れかゝりし落花のいく片、床几にもちる長閑さに、移るともなう長居すれば、談上手の媼が口「お客樣の樣子を窺へば、どうや

ら勇みなお力角樣、去年の暮は大坂の大闘とかの仁王とやら、名も恐ろしい力角が來て、此地の明石闘に美事負たと江戸中での大評判、貴公さんもお江戸なりや屑見廣いでござりませふ」女は男の顔見上て、思はずにつこり片笑四、男は輕く聞流して「これは媼さんいかい邪魔、どりや歸らうか」立上る、折しも來かゝる以前の武士、醉へる足元跚跟と、覺束なくも庄几の前、倒れんとして危なく蹈留りしが、矢庭に女の襟上掴み「己れ無禮な女奴、武士が通行の邪魔ひろいで、足にかけて蹴づかさうとは奇怪な、見ろ、この鞘に汲が着たわ、これ、ウヌこれでも申し譯あるか」息卷荒くいひ罵しりて引立んとする不法の振舞、媼は呆れて片陰に身を引けば女は何と言譯も意外のことに言葉も出す、理不盡に腹を煎れど、荒立ては妹の身の上と、ぐつと堪へて男は靜かに進み出「これは〳〵お武家樣、これ

なるは私の奴婢、いかなる紙匂かは存じませねど、心あつての所爲ではございませぬ、無禮の段は兄の明石志賀之助、幾重にもお詫いたします程に、此場の所は枉て見免しを……」聞より武士は愈々聲荒らげ「ナニ、已れは志賀之助となゝ、それと聞ては猶さら勘辨が爲悪いわ、たかゝ相撲取の分際で、うの高慢の口のきゝやう、頭が高い、汝は已を誰だと思ふ、今大江戸で鬼神も恐るゝ神祇組の、高坂伊織の名は聞つらう、二才奴、慌えて尻込な際間なく馬しりて貰かくる喧嘩、明石は猶も怒らず喋がず、地に着んばかり頭を下げて「お腹立の段々はいかやうにもお詫の仕まつりますれば、妹の疎忽は偏へに御容赦願ひまする」聞も終らず志賀之助の、肩の邊を土足に蹴上て、武川は威丈高になり「ニー、若蠅い泣言聞ぬわい、新刀試しに屈竟のこの代物、それ平太、この女郎身が邸へ引けッ」聲諸共に木

立の陰より立顯はるゝ前の黨類、明石、仁王の姿を見るより「やゝッ我や仁王仁太夫か、ウムられで必が讀めだわい」

第四回

豫て噂の神祇組に暴威を振う高坂伊織、仁王に肩を入ると聞たも今日の難題持かけしは、たゞ酒の上の横車、無理推にする亂暴とのみ思ひしに、仁王も共謀の喧嘩買か、これでは此儘納まるまじ、詫たりとて聽れぬものなら此方も飽まで意地張て、命の興奪して見せう、たゞ癪悪りは彼の妹の光江、それもかくなる上からは、何なるものかと陰となり「やゝ、仁王も共謀の巧と知らず、下から出れば附上り、いひたい放題の悪口雜言、もう堪忍の緒も切れたは、敵手にや不足な嘗り四五匹、面倒な一緒に掛れ、伊達にやア差ぬ腰の一刀

切れぬか切れるか見せて呉う」いふより早く飛びかゝりさま伊織が掴みし手首をもぎて、妹を後に志賀之助、憤然として面相鋭く、大刀の鯉口切て突立たり、先ごられて二足三足、後へ退りて身構へなし、何か癇なと左右に分れ、共に大刀の鞘を拂へば、いつの間にやら立集ひし四方の人立、はつと開いて、うれ抜たと勇搖きて、明石、明石と囃し立、片唾を呑で見物す、あはれ今や落花狼藉血汐の雨の降んづ折柄、退たどいたと群衆を排て、躍り込だる一人の男、白刀の間に立塞がり「其喧嘩巳が貰つた、此市郎兵衛が引受た」見ればまだ三十の男盛り、水々しき撥鬚にゆるぎを打せ、大手を廣げて突立たる面魂しゐたゝは引じと見ゑたりけり。

武士と見れば、一町手前の町角避て曲り、行摺の袴さばきに、立つや座はどのことにも、怒つて切無ごときを恐れたる當時の習、況てや

喧嘩の場所、近う立て見物を居合抜と心得たる阿房にあらぬ白刃の間、飛で入たる不敵の傑者、偖越の素町人小面憎き振舞やと、伊織を始め一同は、今さら切掛し刀の張合抜つ、一足退りて殺烈しく

「やあ猪口才な仲裁呼はり、分に過たる喧嘩の留立、汝等の出る幕ではないに、すつ込で遠くより拜見せぬか」一人も劣らぬ高慢面、多勢を頼む空威張「抜た刀は是が非でも、血で染上ねば鞘へは納めぬ、音に響いた神祇組、知らずに出たか知て出たか、その名を聞て消魂たらう」仁王は一人氣を揉顔、伊織の袖を引きつ、一同に目まぜすれど、氣付ぬ平君は横放出「やい、汝あ此方にのみ口聞せて、まだ挨拶も吐さぬとは、犬か豕か人間か、わんと吠て名を名乗れ」雨のやうに降かゝる惡口雜言、雀の囀づりと聞棄たる市郎兵衛、笑顔造つて身を低う「いや申後れました、私奴の名は、夢の市郎兵衛といふ申

客な野郎、眼々の前を遮ぎり、仲裁なぞゝは分に過ぎた不了簡なれど見たからにや楽られぬ私の天性、此場は枉て私奴にお任せなすつてお呉なせい」言葉もいと慇懃に、事をわけても我慢の高坂いッかな聴ぬ強情無礼「ウー、汝なに夢の市郎兵衛とな、さう聞けばどうやら小耳に掠つた事もあるやうな名、したが抜た刀の手前、武士の意氣地はかへされぬ、折角なれどこの喧嘩は引れぬわい、出るとも引くとも勝手次第、對子は撰ばぬ神祇組、夢の市郎と聞ては猶さらこの腕が鳴てくるは、喧嘩の場所には問答無益、首と胴との接てる中、思案定めて早い返答聞うかい」

第五回

推通したる横車傍若無人の振舞に、悟しとおもへど市郎兵衛、胸に疊んで顔和らげ「切つ張つは臆病者の町人には出來ぬ事、殊にお武家を對手になぞとは、眞以て存じもよらぬ、此場の出入は温和う私に預けてお呉なせいやし「ねゝ。喃々わ、成らぬといふに推強ふ邪魔立しをるは敵たう覺悟か、七面倒な其處退居れいふより早く市郎兵衛が、肩先掴む武士が利腕拂ひ退、俄かに變る憤怒の面色、屹と突立大音聲「虫を拝へて聞てゐれあ、半狂氣の熱の吹方、巳等わ命が惜くねいな、性根の抜た土偶坊、巳が敵手にや足ねねが、受てやるから、さあ三一、犬威しの其庖刀、抜るなら抜て見ろいー」人の厚意を打消すもと、先程より差控ゐたる志賀之助、かうなつてはと進み出るを、市郎兵衛は押留め「名はかねて聞知た明石、行がゝりの今となつては、喧嘩は慥かに巳が貰つた、足弱連では危險々々、万事は巳が……」と胸を叩いて、辭むを彼方へ推退くれば「それぢやア親

方、已の義理が……「いやさ辭退は時に依る、これさ早くッ」と後ろに退られ、かくなる上は出んも有繋と志賀之助は、光江を連て彼方の木蔭、此方の伊織は怒氣心頭に逆ばしり、逡巡仁王平吾を後に矢聲も掛ず切付れば、市郎兵衛は右に躱して、飛鳥の如く飛込さま、胸板拳にぐうと突ば、力込たる足元浮て二歩三歩よろ〳〵と、蹈倒かゝるを隙さず入たる眞の當身、ウンとばかりに仰反る、伊織を、ては叶はじと救ひも得せず、ばら〳〵と逃行く仁王等、平吾ばかりは踏留りて、二打三打切かゝりしが、手並に恐れて遁んとするを、おのれ卑怯と追ひ懸しが、はや夕暮の木下暗、つひに姿を見失ひぬ、市郎兵衛は追薬て、元の所に立歸れば春の夕月はのめきて、暗を隈取花の淵明り、盡の賑はひに引かへて、上野の山の夜の靜けさ、遙けき森の彼方に當りて、擂出す入相の撞木魂に響きて物淋しく、立置る夜の

霧は、深く四方を包みて林の木立朧々〳〵、一刷毛の墨繪にも似たらん此景色に、思はず見入て、立盡したる市郎兵衛、身に泌む夜風に心付き、悠然と袖打拂ひ倒れる武士を後目に見やり「うはゝゝゝ、さて立派な御寢姿、澤山夜露を吸てござれ、どれお先にれ暇せうか」と獨語つゝ行んとするを、呼留て、明石に光江、木立の陰より立顯はれ、明石は恭しく頭を下げつゝ「お緣もない御方に、身に餘りたる情の助力、お禮は言葉に盡されぬ、これ妹、改めて能うれ禮申さぬか」光江は兄の袖の陰、顏の紅葉も夜目には心安しと、述る言葉もしはらしう「妾よりして思はぬ難義、お助けなくばどうなることやら命の親の市郎兵衛様、御恩の程は忘れもせぬ、してお身体には別段のれ怪我も受はなさりませぬか」市郎兵衛は氣の毒げに「いやさ思つたより弱い奴等、蚤の喰たはどの疵も受ずに、れ禮はかへつ

て痛み入る、したが能う、今頃迄うてに殘つてはござつたな、夜に入つては歸りが氣遣ひ、どりや家まで送つて進せう程に、遠慮は無用さゝ出悪やせう。

第六回

以一札申進候扨昨日配下の未熟者於上野山散々の馳走に預かり冥加至極改めて此方より御禮申陳候就ては折角の馳走に返禮不致も心外千万明夜七刻頃弊宅に於て心ばかりの饗應致し度候但し入來無之時は當方より出向可申候

以上

水野十郎左衛門

夢の市郎兵衛殿

殺氣紙面に躍つたる恐ろしの一札、向島は白髭の片邊、市郎兵衛が宅に舞込ぬ。

かゝらんとはかねて覺悟の前、驚ろかぬ心も今さら傾むくる頭の狀しさは、我を親とも頼む兒分の行末、水野は音に聞へし鬼旗本、これに續く無道の白徒、我から楽つる命ならねど、白刃の間に鉄湯の酒盛、意地と意地との張合には、盃に血汐滴がんづ互ひの奥底、我に笑ふてのくる贈はあれど、彼が執念く祟らんの心は讀めたり、我身一つの上ならば、この素首飛ばんまでも、一座の贈玉挫き潰して、こて面白う遊んでくれべきに、多くの兒分といふ五分の弱點あり、意地を撓ても無理通さする胸悪さ、苦しき我慢も男の道かや、うれも立ずば腰の一口、宛行扶持に痩細りし彼等の素首腕の限り切り落してやらんも一興、この場となつては不用の命、美事死で退んに手

間暇入らぬ事、どりや秘藏の一刀、檢査やうか、と、取出せし一刀、溜暗き行燈掻立て、拔放す中身は二尺、露凝る刀尖燈下に閃して屹と見詰め、暫時無想の市郎兵衛、眉字に迸ばしる滿身の英氣、名匠が研ぎたる腕に、刻み上、たる像の如く、身動きもせず居たりしが、徐て大刀がらりと投げて、大息ふッと吹かくれば燈火ゆら〳〵と呼くも凄まじ。

先刻より襖の片蔭、窺ひ寄たる兒分の一人、矢庭に其場に躍り出で思ひ切つたる風情にて、市郎兵衛が前に手を突きつ「親分、樣子は殘らず先刻から、彼處から見て取た、どうした譯かそれも大方は知つてゐる、こんな時こそ兒分の役、打明てこの已に萬事は任してお呉んなせいやし、卑吝な奴でも命を賭たら、ちつたあ親分の代理も出て來やう、何と親分明しちやや呉なさらぬか」人ありとも思ひ設けぬ

に、不意に出られて市郎兵衛、はつと驚ろきしが素知らぬ顏「オ、汝や磐若の吉、いつの間に來てゐたのだ、うれに周章たうの物いひちつとも譯が分りやしねえ、それに打明ろの代理に立うのとそりや一体どういう事だ、さり氣なくいふ市郎兵衛を、磐若の吉は恨めしげに「昨日上野の花見から、血色勝れぬ親分の樣子を變だ、と聞紀せば神祇組の武士と丁度昨日喧嘩があつたと世間では高い評判對手は誰だと探つたら親分お前だと人がいふので、そりや大事にならねば好がと、内々心配して聞う〳〵と思つてる中、夕方來たは見馴れぬ武士、どうやら見たやうな氣もするので、思い出せば博賭部屋で二三度顏を合はしたことのある神祇組の奴、扨はと其時思つたが、何の仔細か晩になつたら聞うと思つて家へ歸り、出直して來て見れば、内は寂然人氣もなし、うれでは留守かと覗ひて見れば

親分一人、腕組して物案じの樣子なれば、愈いよ胸に縣つて溜らず密々忍んで視の蔭、先刻からの怪しい擧動、的きりられと讀めたのに、親分今更隱し立は水臭ねといふもの、神祇組から招びに來たは底の知た巧の仕ごと、親分が直に行くまでもねね、私に行してれ吳んなせへ、決して親分の面を汚すやうなことはしねえから」

誠見へたる辭色烈しく、膝詰寄て返辭を待つ、天晴義に勇む男一匹嬉しき情に市郎兵衛、動く心を推靜め「いや吉、今に始めぬ手前の眞心、身に泌々と有難いが、今となつて隱しはしねえ、万事打明て話しもせうが、手前を遣ることは決してならねね、何故といつて考がへて見ろ、市郎兵衛は對手が恐ろしさに兒分を代理にやつたと世間でいはれては、此已の顏も潰れる譯、何も心配するには及ばねえ向ふは多勢の神祇組とて、危なくなれば逃る迄のこと、それでは卑

怯と向ふで笑へと、已の名落には、成らねえのさ、したが此話は此場限り者なの奴にや洩すなよ、明日は密そり行て歸り、世間に知さず納める丁箇、吉、好いか。解つたか」諭せど呑込ぬ吉は猶は、何にかいはんとする折柄、表てを叩たく音についていて、御免と音なう人の聲あり。

第七回

朧夜の月影、深て隣の槐樹の梢に繞り、垣根の小米花一團の淡雪は の白う暗を染て見透も風情あり、夜番の柏子木門過行し跡は歸雁哀れに空を掠めて鳴渡るも、憂ある身にはつらく、悄然として、椽の柱に靠れ、思ありげに佇ひ女ありけり。夫座ぬ獨り寢の床淋しく、待身の待遠さを月に喞つか、さりとては女房めかぬ妻の處女らしさ

さらば郎の忍ぶ夜の樂しさを、盛算に長々の時を恨むか、更る夜の鐘に曉の近きをはかなむか、歌麿が香へる筆に寫し出たる浮世美人、こゝに脫出て戀に惱むらん美くしの女性に、露ばかりの吹思はする果報はろもや誰が享くる、あはれ郎の罪深さ、七生きつて女冥利につきはてんとは、誰妬みの陰言ぞや「今歸つた」と門の口音なうは兄志賀之助の聲、女はいそ〳〵と立迎へ、うこは女の心細かく手に試みる鐵瓶の湯加減好しと取下し、注で進むる煮花も愛想、兄は咽を潤して「この夜更に貴女は能く寢なんだの、先刻打たは慥か九つ、嘸眠かつたであらうのに、あゝ親もない親身の兄妹、已ばかりが頼りと、いへ、日々の世話厄介、苦勞に負て病らふてばし呉るなよ」世に嬉しきは親亡き後の兄の優しさなり、光江は有難女の心弱く、はろりと落す一雫を、輕く笑に紛はして「れはゝゝゝ、兄さんと

した事が、他人行儀の眞面目らしう、妾や开な事聞たうもでざりませぬ、兄樣、して今日の親分の模樣はね」明石は急に愛の顏色隱んとすれど光江は目敏く見て取「どうやら澄ぬ兄さんの顏色、矢張今朝案じたやうに我意に業る神祇組、難題でも持込だのではでざんせぬか」明石は頭を打振て「何、あの方は、案じる事ぢやない、理詰で行うが先方が負、紛紜いふ事もあるまい「いね、兄さん、妾が女の身ぢやからとて其隱立は水臭うでざんすぞへ、殊に昨日のことといふは、妾しの身から起つたこと、親分までが纏添に、愛目を見るを乘れいて、妾や傍觀は出來ませぬ、どうぞ眞の樣子、隱さずいふて下されませ」盛みかけたる言葉鋭く、膝推進めて責問はれ、兄は苦しき胸の中話しなば常より男勝りの光江のこと、よも默止ては止まじと氣性、萬事は我一人にとは思へど、さて何として平穩には納むべき、今

宵も今宵とて兒分の衆が、涙ながらの留立も聞入さらし夢の市郎兵衛、なまなか我の差出なんか、人の情を水泡と掻消すにも當らんを、口塞げられし妹にまで打明ては、男甲斐なき我の顏向ん方もなし、左やせん右と思ひわづらふ當惑の景色、光江は思ひ詰めては言葉凛々しく「兄さん、もう大概は話さいでも覺つたに、此上の隱し立は詮ないこと、たとへ女とて男の中に育つた妾、女々しいことはいたしませぬ、身に出來ることなら何なりと、決して厭ひはせぬ程に、さゝ早う相談かけて下さりませ、女の猿智恵にも、又好い考がべが浮ばうも知れませぬ、今は中々說き迷はされし志賀之助、垂頭たる頭を擡げ「分つた妹、隱したは已が惡かつた、今は殘らず談しもせうが、また伺の勝氣を出して、入ぬ女だてらの差出はせまいぞよ、談しとても別ではないが、今日神祇組の水野から夢の親分に宛てた招

きの狀、底の心も大方は、押取龍て討うの方略とは、三才兒でも分ることとなれど、負ぬ氣の親分のこととて、兒分も已も留たれど、思ひ込んでは聞入ず、どうしても明日は行うと、意地を張るに手を着けかね、一旦歸へりは歸へつたが、對手は名に負ふ神祇組、行つたが最後活きて歸へさう道理がない、妹飛んだ大事になつたなあ」腕組堅く志賀之助、はつと太息に暮るれば、光江もいとゞ眉根に愁の色を見せて思案に垂れし頭を擧け「あの憎らしい武士面、又しても我意張て、人を困らすことばかり、兄さん、よい考がへもございませぬかあぐんだわ」と溜息に沈むに引かへ、光江は何か思ひ出たる如く、眩と兄の顏を見守り「兄さん、差出と叱られるか知ませねど、好い思ひ付がございまする、何事も留ず已下さりませ、ういふことなら

親分の代理になつて明日は水野の邸に參り、三方四方穏かに妾しが納めて見せませう」凛としていひ放す大胆さ、志賀は呆れし目を瞬り、言葉も急て「な、なにお前が……」「はい妾しが……」、案じることはございません、留守に行て下さりませ」思ひきや優しの寒紅梅雪を彈く力あり。

第八回

弓形の小窓に、朝日影いさゝむら竹の影を落して、群鶴の襖に殘んの香煙綾くたな引く、靜けき一間にまだ昨夜のまゝの夢覺やらす鼾聲高う寐入たる武士や誰れ、俠勇音に聞へし水野十郎左衛門、慶長の矢叫び、今は昔しと見て、雀の聲も夢に障らぬ、げに長閑けき御代の朝かや。

する〳〵と曇さはりも打忍びて、襖引開けしは用人と覺しき半白の老武者、主の樽に若添て、幾許の俵草鞋に踏躪りけん皆しの面影は、微かに殘る小鬢の疵に殘れり、跼まつく枕上、衾の上より搖動して「殿、日も高うなり申した、お目覺あります、殿、殿」三聲三聲呼覺せば、十郎左衛門眠り漸やう覺つ、衾を撥て起上り「れゝ、玄作か、又しても夢妨害げ居る、何ぞ用でも起つてか」「殿、今朝は御寢起の目覺しおざる、御機嫌の直されて、爺を叱つて下されますな、あはゝゝ」笑ひも憚らぬ主の前、隔てなき主從の間なるべし「何、目覺しとやうれは何ぞや、爺が又戯ひれうと思ふて、あらば早く見せて呉」「殿的中てれ見やれ、うれは生物でござりまする「なに生物ぢや……小首傾けながら「解らぬ何ぢや、申して見い「さらば申しまするうの物は美くしい女性れ願ひの筋あつて直々の御目通り賜はり

たいとの願ひ出先刻より玄關に控ねさしてござりまする、殿には定めてお心當りが……」いひさして主の顏、當惑の笑止さはいかにと覓へば、十郎左衛門堪へぬが如く打笑ひ「止めい止めい爺、其謀略に乘る空心ではないわ、歳甲斐もなう詰らぬ戯言、身共に逢ふなゞといふ女郎、大江戸中捜したとてない筈、時に爺、高坂伊織はまだ見ねぬか、參らば直くに通して呉やれ」眞實とせぬ主の樣子、玄作はもどかしげに「まことと殿にはお心當りもござりませぬとな、さらば何用のれ目通りやら、參つたは實でござりまする」嘘らしくもあらぬ眞顏の玄作、十郎左衛門不審の眉根を寄せ「なに眞實とは、はてさて心得ぬ女、して年齢は幾歳ばかりぞ」「歳は十九廿歳と見ゆる程世にも稀なる美くしの者」「ふう、男でも憚かる身共の玄關に取次を乞ふ不思議の小女郎、じたい何用の顏やら、よし逢つてつか

はさう、玄作其女これへ召連い」「なにお逢なさりますとな、さらば別間に「いやかまはぬ、この儘で逢うわ」意を領して出行く玄作の後影見送つて十郎左衛門暫時不審の雲に迷へり。

門の大戸、開闔の樞にも躍打れて、表通る人も急足に駆ける水野の邸、小犬も尾を卷いて恐るゝ玄關先、繊弱き女の身一つ以て、案内を乞ふさへ不敢なるに、直々の目通りしての願ひことは、それや何のロの端より出る音ぞ、世には大膽の女もありけるよ、うの女とはいかなる者、逢ふて喃々の仔細聽かば、五尺の野郎數人を集へて、軍談に夜を深す小夜の圓坐にもまして興あるべしと、十郎左衛門几案に身を憑て、待つ間程なう玄作の案内に連れ、優やかに禮越、手を閥ねたる女の品やかさ、此方はまつ辭を懸け「身共に目通りしたいといふたは汝か、身が十郎左衛門である、女名は何と申すぞ」膽膽

に徹る鋭き聲も、女は東風の上の空、恐れげもなく顔を擧げ「恐れ多くもお目、通り願ひましたに、早速のお聽濟、身に餘りましたる面目と、難有う心得まする。申し後れましたる妾の名は、光江と申して志賀之助の妹、お願ひの筋は夢の市郎兵衛がこと「なゝ何んと」水野十郎左衛門屹と居直り、慈ろきの眼元に怒氣を示して睨まへたり。

第九回

烏羽玉の暗の巷にわつと喊いて斬かくる白刃の影にも、怖じともせぬ水野十郎左衛門思ひ懸なき妙齢の處女、露にもたへぬげの佳人が、否端に逃ばしる不敵の願事には、あつと呆れて言葉も出ず、じつとうの顔見守るのみ、光江は一膝刻み出、涼しき眥きつと睨りて

「身の程知らぬ差出の振舞、小憎き申條とのお腹立空恐ろしう存じまするれど、この願ひさへ御叶へ下されての後は、不禮の此身は御存分になされても、露恨みとは心得ませぬ」殊勝の心根即ければしばらし、元來俠氣の十郎左衛門、稍動く心の底、以前に變る聲和らげ「ウム、願の條一應は聞て得させう、心を靜めて仔細を語れ」思ひしよりも優しき御方、光江は嬉しさに今は恐ろしき念もなく「難有き御仰せ、冥加身に餘りて嬉しう存じまする、れ言葉に絶りて申上まする遂一、卑しき身の言葉の無禮はお叱り下さりませ」と平伏せば、十郎左衛門輕く點頭て「その儀は許す、何事も應面なう、包まずいふたがよい」光江は屹と頭を起し、今は臆する色もなく「願ひといふは別儀にもござりませぬ、一昨日の上野の花見に思はぬ御遊恨受けたる夢の市郎兵衛がこと、一伍一什何とぞ聞なされまし

たやらことを分くれば、始めの起りはこの妾しの粗忽より、あの方様はほんに見かねての仲裁が、あの紛糾となりましたる譯、越なら ぬ妾よりして、入様の疑目見給ふが辛く、推てお目通に申開立うと、分際忘れて上りました仕誼、願ふは此身一つ、御腹癒に御存分になされまして、市郎兵衛への御怒すつぱりとれ晴しなされて下さりませ」思ひ入たる風情にて見上れば、眉端びりゝとふるはして十郎左衛門、「れゝ女能う申したが、ことに當つては武士の意地立通さねばおかぬとはいひながら、非理の不法は十郎左衛門、今まで犯したことはないは、世上の批判にかゝらうこと、必らずともにないやうに組中に戒しめてはあるものゝ、何がさて血氣の若者、時には無理な喧嘩も仕うづ、前の上野の喧嘩に就ては、是非曲直は知らねど、も、あまり抽なき恥辱の取りやう、一圖に癪に障つた故、命の奥取せ

うとしり、これも武士の意氣地ぢやわ、今聞けば其方の申條無下に耳は反されぬ此上は改めて當時の話し聽て取せう懼かりならいふたが好情には脆き十郎左衛門、身を投出したる俠女の振舞、感じては中々に心解て、我を狂げ意地を撓ても義を立んとする有樣は武士、花は櫻木の香ばしき旗下八萬の棟梁かや、光江は重ねゝの厚意嬉しと盃に受う手に力を籠て身を進ませつ「お尋ねの趣むき懼かりあることにござますれど、今は隠しなう申上まする ことの起りは上野の山に、兄志賀之助と花見の茶屋、どうしたことの間違ひやら、通りすがりの一人の御武家、妾の足に躓いたとやら矢庭に妾の横上掴み、手打にすると強いお怒り、兄も共々詫ましたれどお免しないに途方に暮て居りまする所ろに、又木陰より四五人の同類、中の一人は仁王仁太夫とて、兄とは敵同士これは必定い

たやらことを分くれば、始めの起りはこの妾しの粗忽より、あの方様はほんに見かねての仲裁が、あの紛糾となりましたる譯、数ならぬ妾よりして、入様の憂目見給ふが辛く、推てお目通に申開立うと、分際忘れて上りました仕誼、願ふは此身一つ、御腹癒に御存分になされまして、市郎兵衛への御怒、すつぱりとれ晴しなされて下さりませ」思ひ入たる風情にて見上れば、眉端ぴりゝとふるはして十郎左衛門「れゝ女能う申したかゝことに當つては武士の意地立通さねばおかぬとはいひながら、非理の不法は十郎左衛門、今まで犯したことはないは、世上の批判にかゝらうこと、必らずともにないやうに組中に戒しめてはあるものゝ、何がさて血氣の若者、時には無理な喧嘩もせうづ、前の上、野の喧嘩に就ては、是非曲直は知らねども、あまり猛なき恥辱の取りやう、一圖に癪に障つた故、命の與取せ

うとしり、これも武士の意氣地ぢやわ、今聞けば其方の申條無下に耳は反されぬ此上は改めて當時の話し聽て取せう相かりならいふたが好情には脆き十郎左衛門、身を投出したる俠女の振舞、感じては中々に心解て、我を狂げ意地を捨ても義を立んとする有樣は武士、花は櫻木の香ばしき旗下八萬の棟梁かや、光江は宜ねの厚意嬉しと豊に実ら手に力を徳て身を進ませつ「お尊ねの越むき憎かりあることにござまするれど、今は隱しなう申上ますることの起りは上野の山に、兄志賀之助と花見の茶屋、どうしたことの間違ひやら、通りすがりの一人の御武家、妾の足に躓づいたとやら矢庭に妾の樣上掴み、手打にするとの強いお怒り、兄も共々詫ましたれどお免しないに途方に暮て居りまする所ろに、又木陰より四五人の同類、中の一人は仁王仁太夫とて、兄とは敵同士これは必定い

ひ合じての難題と、兄も今は堪へかね、已に大事にならうとする間に入たる市郎兵衛、二言三言詫を入てもお聽入のないばかりか散々の嘲弄にあの切合とはなりました、申憚かることなれど、非理は武家にあることゝは、人も知たる今度の喧嘩、もし此上に市郎兵衛を、手に掛給はゝ世間の人の批判もお名折の端、たかゝ町人の賤しき身一つ、免したとて數をも足らぬ者、御寛大のお目醜し偏へに願上ます小川の、流れの呼きも、激してはさら〳〵と陳立たるとの始終、默然と聞ゐたる十郎左衛門、思はず小膝はたと叩いて

「オヽ、勇ましき女、氣味の好い奴、其方の俠氣に免じてこの十郎左衛門、我から意地を棄て退け、市郎兵衛が男を立させうわ、武士らしうもない高坂伊織は、我に思ふ所存がある。

打たば響の如く聽せん大江戸は八百八町の乾兒の者に隱れ忍びて、我から投ずる虎の口、應する心は持たぬ死の一字を、一椀の茶漬さら〳〵と掻込で有繁は名殘惜まるゝ知合の誰彼、盞前にそれとなく尋ねんと、引かくる羽織の襟かへらぬといふを忌んで、直して呉れる妻もなき身は、中々に心安き門出なりけり。

玄關といへど一間の上り端、悄然と見送る磐若の吉兒とも組んず無類の荒氣も、今朝は殊勝らしく沈みし顏の色、佳人の泣顏より哀れは殊に深し「親分、開なら行つて來なせい、今になつちやあ何にもいはねねやる所ろまで小氣味能くおやんなせえやし」顧る夢の市郎兵衛、木石にあらぬ嚢り聲、ぐつと呑込む万倆の涙だつきは人

一倍の胸の湧立、「吉、跡は何分頼んだぞ、俺が若も歸らずば乾兒の奴等も默つちや居めゑ、どんな騒ぎにならうとも知れず、其處は手前が巧く透して、荒立たことをさせねゑでくれ、明石が來たら呉々も俺が心中を話して、俺を冗死にしてくれるな、どりやろうんなら行つてやうか、吉隨分身体を大事にしろ、例の荒氣は決して出すな、エヽ詰らねゑ取越苦勞、さも歸つちやる來ねゑものハやうに、吉笑つてくれるな、アハ……。強て笑ひに紛らかさんとすれば、吉は堪へ難き眼は涙一杯に、「跡の所ろは親分私が引受けたしたが親分出來る堪忍なら無理にもして、いふ迄もねゑけれども乾分の身も思つてやつて下せえ、万一のことのあつた時にやあ、骨は俺が拾ひに行く、親分の名は命に懸けても落しやあしねゑ、心丈夫にお遣なせいやし、市郎兵衛はは、笑て「ウンろれを聞へて安心したろん

なら吉、駄遣往てくるせ。出行く背戸の牡丹櫻、一英はさりと散て聲あり。

＊　＊　＊

万死に一生覺束なき身はこれや冥府の閻魔の廻門なるべき水野の大門、破れよと打叩く音、門番の爺が聾耳にも烈しく聞ゆるにこは不時に誰殿の御入ぞや、今日は上より何の御沙汰も下らぬにと夕膳の箸投棄て蒼皇ふためき潜戸細目に開て外窺へば更に人氣もあらずさても奇怪諸侯も憚かる此大戸を、戚むれに打叩く命知らずの放氣者も廣き世界にはあるものか、已れ僻者苛き目見せんと門番むしやくしや腹の勢ひはげしく潜戸手荒く瓦落離と引開け首差し出して、誰ぢやと咎むれば、雲突くばかりの大男、大股に歩み寄り、「これは御門の衆御苦勞千万、當家の御招によつて參上い

たせし夢の市郎兵衛開門の儀頼み申す「これは又狂氣の沙汰かな、天下の直参旗下歴々の御門前、見れば町奴の分際に開門呼はりとは氣心知れぬ白徒かな、今朝の女といひこの狂人といひ、世には様々の変り者もあるよ、おのれやれ推参至極の廣言やと、棍棒推取り門外に飛出で、「やい汝りや何ぢや、なゝ何者ぢや御當家を何と心得居る、江戸中に響いた殿様に、御面會しやうといふが第一不届きなるに、開門とは奇怪の申し條たとへ狂人とて容赦はせぬぞ、棍棒に敷石叩いて、息も継せず怒鳴立れば、市郎兵衛は大口開いて打笑ひ、「あは……これはまた頗驚な御門番、入らぬ詮議は後にして開門すれば役目は濟む、仔細は直々水野殿に逢て申せば分ること、さつさと開けて入て下せゝ、不敵に呆るゝ門番は恐々よ戸を荒らげて、「否やならぬお目通りがしたいとあれば、此潜戸から躙躙ばつて這入が宜い。待手に塞がる門番を推退けて市郎兵衛、「エゝ面倒な御門番、那麼立せずと開さつせい。聲高に爭ふを内より開付て立出る彼の玄作、「かうれ門番、御門前をも憚からず何を爭ふぞ見るより市郎兵衛は進み近づき「御招きによりて參じたる今日の珍客夢の市郎兵衛でござりまする開門の上御案内の下されませ。

第十一回

已れやれ無禮の奈奴、其處一寸も動かせず眞二つと刀の反打　すかと市郎兵衛は身構へをしてぢつと玄作の様子を見守れば、玄作は聞より恭しく禮を正し「なに夢の市郎兵衛殿となこれは〳〵能うか入來、何れも不心得の下郎が罪、たゞ大目に見免されて主人

も待兼て坐す、さゝすつと通られい。さりとは又不思議の取扱かひ悉殿中々く味をやるわいと心の不審を面に包みてうの爲んやうを見てあれば、玄作は呆れて控ゆる門番に耳打して大門きいと開かせたり。我に油斷の不意を衝て興がらんとの計畧か、扨はとあれ此場となりては、應するは抽なき所爲元より棄て退たる命一つ、何とならうか時の運、覺悟極めては中々に心強く、「これは御門の衆前の過言は御免あれ、夜陰の御勤御苦勞に存じまし。會釋して悠々と打通る玄關前、市郎兵衛先に立たる玄作の袖を扣へて「町家育ちの我儘者、武家方の作法は若蟲うて出來ませぬ、萬事は手輕の御案内、無禮は拄て御容赦願ひます。玄作後ろを振かへりて「いやうれは御念には及ばぬこと氣隨氣儘に任せられい「さらば御免なさりませ。太刀片手に後ろに隨がへば玄作は書院と覺しき廣間を通

り過て傍への小座敷に案内しつ「今折惡う來客のござつて、ことと六ヶ敷い談話の最中やがて客の歸る迄は緩々こゝに休急で待せられい、うの中案内申すでござらう。いひ棄て立行く玄作後ろ影見送りて、市郎兵衛は拱ぬく腕さまく に思ひ廻らせど、怪しきは水野の心底今日の振舞なり、かねて聞如き荒氣の武士ならばかく便々と我を一間に留めおくべき筈のあるべき來客とはいかなる者皆、我を待同腹の武士を除きて、餘談に時を移すとは解しからぬひ條かな總てがことの表裏とは忖度られぬ圖の書やう、たかゝ我一人ばかしを五人十人の智惠搾りて風托の首鳩ひるにも及ぶとしきにと、首傾けて耳を澄ませば何やら聲高に語らうさま遠く隔てす聞ゆるに、市郎兵衛はふと頭を擡け、傍への障子押開けば中庭を隔てゝ吳竹を繞らせる奥座敷の小窓に寫し出す二人の影さ

ては來客とは全たくなりしよ、當の敵を前に控へて、いかなる用談に時や移すと、怪しみつゝ見る中に、立上る一人の影今辭して歸ると覺しく暫らくして此間の外を壁障りも荒々しう玄關の方に立出るけはひせり。客は歸れりいざや我上、面白き狂言の幕は開たりいかなることし出すやらんとさすがに心の臍を堅めて待つ間程なう間の襖押あけて前の玄作「客人長らくの退屈主人の仰せにより案内申す、かうでざりませ、いはる儘に道引れて恐れげもなく進み入る奥の方、一歩は一歩より深く死地に入る市郎兵衛、かねて覺悟の上ながら一寸の隙さへ見せず、眼を前後左右に配りぬ。襖の隅々、座敷の隈々、油斷なう心を注れどさらに人氣のありとも覺え ず門前通る按摩の笛、遠音さたかに聞取らるゝ迄家内の靜けさ三間ばかり打過ぎて、燈光一線微に洩る一室の前、玄作は立留りて襖

さらりと引開つ關際に跪づきは。「殿お召に依り夢の市郎兵衛參上いたしてござりまする。

第十二回

襖まの藍に殺氣滿々、燭光暗き迄に恐ろしの武士居流れ我を膽と堅唾呑居らんと思ひきや、玄作に導びかれ來し奥の間には闇燈風も蹙かず靜かに一室を照らし端然と控えたる十郎左衛門、兩刀さへも、床間の刀掛に懸れり意外の有樣に市郎兵衛ものの足らる心の張も弛び、さては巧みの底は深きよ卑怯の痩武士おのれ何程のこと仕出さんと膝を据ては中々に恐怯す、すつと襖まの内に入り有繋に禮儀を崩さず手を仕へ「私奴は夢の市郎兵衛と申す素町人お招きに依つて推參いたしてござります、女房は持たぬ身にも宅

には乾兒の譯彼、夜を待ちわびて歸りを待つ可愛い奴もございさすれば御手料理の馳走の品早速頂戴の仕まつり、歸つて乾兒にも喜こばせたうございまする。我より促がす不敵の言葉、水野は何と聞しやらむ、怒りも見せず聲穏やかに「ウム兼て聞く夢の市郎兵衛とは汝よな聞しに勝る天晴の骨柄ぢや遠慮は無用さゝもうつと近う進んで心置なう物語らう。づ打解げたる面持に一膝推進むれば、市郎兵衛は猶心許さず「生れ卑しき町人の身では談と申せば米の價位ね、耳新らしいこともございさせぬ、それよりも御武家方の料理鹽梅、早う賞味の仕つりたうございまする「はてさて氣の短かいまづ料理は後にして汝が今まで身を入れた、伊達の意氣地や左右の、物語りも興あらうまづ緩々と試しやれ他意ありとも見ねぬ十郎左衛門の体も、疑がへる心には底意ありげに聞ゐてさ

すが不敵の市郎兵衛も何と當座の思案も浮ばず、水野は何と思ひけん床の一刀引寄るに素破やと見る市郎兵衛が身を搖ふる隙もなや拔打に切付る刀はの稻妻拔しも早し避けしも駿速、刀は渡れて壁を切らんとするを取り直して鞘に納め、呵々と打笑つて座に直り美事の技倆腕前見ねた、今のはほんの試しの狂言、あゝ腕といひ魂ひといひ立派な人物、町人には惜しき男、この水野十郎左衛門か改めて私陸の引手に此一刀は此儘汝に進ずる納受めて呉やれ差出す刀に市郎兵衛は半信半疑の眼少し顰ちせて「何和陸の引手に賜物とな、これは身に餘る面目なれど、まづ其仔細承はつての上、お禮を申すでございませう、腑は落ちぬと刀手に受けて、引下り、煙にさかるゝ市郎兵衛の顔見守りて十郎左衛門、さころと打點頭つ、「なに仔細を語れといやるか、汝は光江と申す女存じぬもう

「エヽ、知いで何といたさう、御遺恨受けた原因は、うの光江より起つたことでござりまする、してうの女か何として……」水野は輕く點頭「フム、さてはまだ今日はその女に逢ぬと見ゆる、こりや市郎兵衛、この水野が意地を楽てヽ心底遺恨も晴たといふは、うの光江から始終を聞いてからのこと「エヽ何と仰らる、あの光江が何して話を……」「不思議に思ふも道理なゞら彼奴中々俠女ぢやわい、女ながらも男に立勝る心根、うの次第と申すは、今朝の程一人の女余が朝の夢を覺して、直々の目通得たいとの申入不審に思ふて逢ふたは光江ぢや、委細を問へば段々と汝等が有狀を陳べ、身共が非理を詰問居る、聞けば道理至極にもあり、殊に命を楽て汝を庇陰ふ、彼女ゞ心底、感としてうの顏を立て遣し、一つには汝が俠勇に愛て、身共が手を引たる譯、今も今とて高坂伊織を、散々にいひ懲してやつた

も、光江に譯を聞しよりの上かく解くれば舊の十郎左衛門、何しに些細な敵思を持うや、あらためて一献酌互さう、玄作用意の盃持て聞けば嬉しき光江の眞情水野の俠氣市郎兵衛はつと退りて首を下け「思ひ懇なき光江の爲に御遺恨全く解たとは市郎兵衛これ程の喜こびはござりませぬ、先刻よりの無禮の段々眞平御免下さりませ「オヽさることと心ろに懇る余に非ず、さづこの盃身共より乾う」光江一人が働らきに血汐も見ずして、解る仲遺恨は水野と流れし酒の薫、云作が自慢の軍談に興を添へて快飲更闌るを忘れて酌かはしぬ。

第十三回

兄樹今朝ばかりはれ茶漬に不承して下さりませ、假は炊ずに行て

急とまするとて、朝の床離るゝや間引結ぶも著皇しく水野の邸へと急き行きたる光江、あはれ話しの落着はいかゝなりしか、思へば心元なき兄の明石志賀之助、待に長き豆腐屋の呼聲、四辻に聞ゆる頃格子引明る手をもとかしげにあたふたと歸へり來れる光江の、周章て方、首尾は上か下か覺束なさの胸とゝろかし突し顏、杖火鉢の樣辷らして、問はんとする矢先を塞ぎ、光江は滑るゝばかりに言葉せはしく「兄さん喜んで下さりませ、願ひの段は届きまして、ざりまするゝ、れ許、容になりました」明石は思はず顏に乘出し「な、なに無事で濟だとな、ムウ、ム妹出來した、能う行てくれたなあ、して話は何いふ風に委細は後のこと、まづ雜と話してくれ」光江は白湯に喉を沾して「はい今朝は途中で夢のやうに水野樣へ參りれ取次を願ひお目通を願ひます、とまだ御嫁なつてゝあつたと見え、御嫁所へお通し下され、初の中はどうやら六ケ敷顏をなされて、志賀之助の妹と名乘たらば血相變ての腹立と見えましたが、段々と仔細を打明けお袖に縋つてお助けを願ひますと、中途からお顏も和らぎ親切に色々とのお尋ね故包みなう當日のことをお談し申上げたので、あの惡僧の高坂伊織とゆうが不法の所爲をお怒みなされて武士の意地を張てゝ市郎兵衛の男を立てやらうと、それは〳〵難有い仰せがあつたので嬉しさに宙を飛び今戻つて參じました」聞より志賀之助も愁眉を開き、ほつと胸をば撫下しつ「あゝうれ聞て安心したわ、はて案ずるより產が安いとはいふたものゝ妹そなたの手柄を話したら親分もどんなに嬉しく思ふであらうか、どりや左樣いふ中にも親分が若し出だしては、皆な容事俺はどうやら氣がせいてならぬ、爲渡一走り、親分に此ことを話し、乾兒衆にも安

心させう、光江ろんなら行てくるゥ」迎ば光江は羽織着せ掛け「はんにさうでござりますす、御苦勞でも此次第、早う報知に行てござんせ、青藥を後に聞藥て、志賀之助は皇着と、本所は横綱の我家より向島なで走るが知く、至り着きたる市郎兵衛は家の門口、開く手遲しと躍り込ば、内には一人手燈と、砂若の吉が腕組に留守居の顔の心配顔、見るより明石は聲を掛け「親分はなだ家にか、大事の用があつて明石が來たといふて下せい」盤若の吉は力なげに「オヽ好所へ明石關、用事とは何だか知ねけれども、親分はもう今朝の中に出てしまふたお前さんにも與々くも宜しくいつて與ろッて樂々いつて行きなすつた、さうして其用事といふなあ、一体何のことかいつて聞して下せい、落ちの顔付いとゞ笑止にべたりと腰を上り口に下して志賀之助は「エなに親分はもう出なすつたか、折角の光

江が苦心も、今の水の泡と消て仕舞ったか、殘念にも口惜いにもなあ談を聞てくれ、語る今朝よりの光江が苦心の數々聞詰つて盤若の吉は、いとゝ遺憾の切面して

「ゐゝ遲かつた、遲つた、とはいへ一旦さう先方が解た事ならなさか、親分が何といふうが、一々眼は立やしめね、明石關、うれとも何なら私と一組に行きなすつて、水野の近所で見張てゐて遣入られねね中、呼留たら一番無事に行くだらう

「ウハうれは好い思ひ付、これから一緒に行て見やうか二人は其に家を立出小石川なる水野の邸まで急も吐あねず、急ぎつゝ夕暮なれど流石に人目を避て一町ばかり手前に忍び今か〳〵と待たれどいかにしけん妾を見留ず月はあれども朧夜の暗きを幸はひに邸近くまで忍び寄り、窺ひねるとも知らずして、潜戸より出來たりしは上野の山にて見覺えある、彼の高坂伊織なりけり。

第十四回

窺ふ人のありとも知らず、高坂伊織は潜りの戸、荒らかにはたと閉め、門に對つて屹とばかり睨む目眥、ただならぬ樣子に、いとゞ心元なき兩人の者は互ひに顏を見合せて、いひ合はさねど磐若の吉、行過る伊織の跡を忍ひやかに、跟け行けば一町ばかりの町角に、待ち合したる二三人の武士は何か密々呼やきつゝ、右と左へ別れ行くにこれには必ず巧みのあること親分の上心遣ひと、引返して明石に語りたれば、明石志賀之助も疑心の首を傾むけ、渝氷を蹈む兩人の心、門の扉に身を寄せて猶も耳をば澄ませども、さして變事のありとも見えず、暫らく時刻を移したり」

玄關の方仄かに明るくはつと差す燭光門の隙間を洩れ來るに兩

人はハッと身を引きて聞けば正しく市郎兵衛が聲音さては無事で濟んでくれたかと思はず、撫下す胸に、またかゝる疑ひの雲は、伊織が前の密談なり。

なき身を覺悟して入りし冥府の門、思ひきや案外の靈應受けて、快よく、飲みたる酒の醉足元危險く辭して門を出つる市郎兵衛を、待ち設けたる明石と吉、矢庭に掴む左右の袂「親分明石だッ」「吉でごせねます、能う無事で歸れましたなあ」情迫つては口も思ふやうには動かず、思ひ惑けなき市郎兵衛「ムゝ明石に吉か、やう氣遣ふて此處まで來てくれたなあ、うれにしてもおい明石、男にも出來ぬ光江の周旋、れ陸で俺の男も立つた、禮は緩々いふけれど、忝けねねと傳へて呉れ、オゝ大分夜も深けた、もう何こでも寢たらうから途中では酒も飲めまい、家へ歸へつて寛々と談しながら飲明さう、吉

さあ愚圖々々してゐねで歸へられねばか」磐若の吉は聲を密め「内の首尾はどうだつたか知ねえが、親分隨分歸りは劔呑でこせねばすせ」「なに歸りが劔呑だと、ろりや一体どういふ譯」訝かるを志賀之助「なあにさ、先刻うちから出て來たのは見覺ねのある當の敵のあの高坂とかいふ奴これは不思議と磐若の吉跡を跟けさすると三四人の怪しいものがまた其角から現はれてなにか耳打した上に左右へ別れたとのこと、これには何か腹惡せの仕返しがあるかも知ぬ、家の中とはことと違ひ往來での不意打ならうんなに恐れるにも及ばねね、氣をゆるしては不覺を取る、用心すれば大丈夫氣を注けて出懸やう」市郎兵衛も思ひ當る如く、打獸頭「卑怯末練な高坂のこと今夜は折角の手筈も水野殿に破られた意趣晴れに何か手出をするかも知れぬが、奴等の手並は知れてゐる、今度こそ

は思うさま吐性骨を挫いて呉う」明石と吉を前後に心配りて歩み出れば、折から深くる夜の空霞深く沈みかゝる月は覺束なく朧の影を地に落して道の片側を淋く照せり、流石大江戸の八百八街水打ちたる如く寂と靜まりて犬の遠吠睡たげに長く聲を引くもさらに淋しさを添へぬ。

只ある十字の辻、暗き軒下の暗の中より誰が抛ちし礫一つ、流星の如く先に立たる志賀之助の肩を掠めて飛べり、素破と齋しく思ふ間もあらず相圖と見ねてばら〳〵と走り出たる四五人の曲者物をもいはずこの三人に斬りかゝりぬ、兼て心構への市郎兵衛少しも驚かず、袖を潛つて走り拔け、矢庭に一人の襟上掴んで投付る「暗暗の不意打とは誰かは知ぬが卑怯の振舞、そんなわい等の鈍刀でこの男が切れるものかい、面倒臭い一度に掛れッ」と大手を廣げ

て突立たる擬勢に恐れて、尻込しが互ひに何か囁き合ひ逃足出して逃出すを追はんともせず、蹴打拂ひ其まゝ兩人を促かして一町ばかり志賀之助と語らひながら來りしが、後に附來しと思ひし磐若の吉の、常になき無言に足音靜けきを怪しみ、浮と心付いて見かへれば、こはいかにさらに妻はなりけり。

第十五回

深ては靜けき墨田の流れに櫓の聲さへ、忍ばして、音もなく下り來く一艘の孤舟ありけり搖曳る空今や雨と見ゆるこの夜深に棹を花陰に留めての遊山とも見わず夜網打つ漁夫の綾瀬の上流に急ぐか、さるにても怪しき遂窓の内には恐ろしの武士、五六人首を揃めて何か密々打語らう狀なり、一人の武士は膝進めて「伊織殿此

處まで參ればもう氣遣ひでざらぬ、重ね〳〵失策の念晴れ、生擒たるその素奴思ふさま、嬲り散して水葬禮といたさうではでざらぬかろれとも他に面白も趣向でもでざつてか「伊織は輕く默頭て櫓を漕ぐ武士に聲を掛け「平吾もう此處等でよいは、船を留めて四邊を能う見張て呉いはるゝ、彼に平吾は櫓をとゞめ棹突さして船を岸近う寄れば、伊織は聲を低め「いや、水葬禮なとゝは古い仕方わざ〳〵船でこゝまで來すとものこと、これには拙者些か圖の書やうゲでざる、まづ万事は拙者に任されい、さていつもになき先日からの水野の所置、組の名折となるも顧みぬ似而非仁義聞けば女郎一匹の泣言取上げて一旦我々と手宮までなし置ながら、忽ち變がへつて見殺すとの自分極あさり、勝手に過たる仕方、各々は何と思さるゝとたい水野は我々を、小兒同然の待遇方、これが第一

小癪に障つてならぬが、虫を押へて下に附ば、益々人もなげなる近衛の振舞甚以て心外千万、うれについて面白い巧の次第、語る前にまづ御心底の程伺がひたうござる、皆々は水野の所置満足と甘んじて坐すか」ぢろりと眼配りて様子を窺へば一同は異存なき顔にも不安の色「いや我等とても水野の我威は甚はだ不快に存ずるさりとて無理にも屈服せねば後々祟りが恐ろしうて、今日まで打過したるものゝ面白き挫きやうでもござれば御助力は必ずいたすでござらう」といふ尾について一同も共に同意の言葉を聞て「然らば包まずお話し申す、巧みとは市郎兵衛の仲を悪口して再び喧嘩の導火付やう、手段ろの手筈は幸ひに生擒の彼奴を此堤で嬲り殺しに遭せ、市郎兵衛が家の前に棄れいて水野が内意に殺させしものと思はせ遺恨を含ませる巧みはかうでござる……」と耳に口寄て囁やき合ひつ「皆々、ないかがでござるもし手筈違はゝうれ迄袂を拂つて神祇組を立退く迄のこと、御異存なぞもござるかの退引させぬ伊織の景色に一同は聲を揃へ「高坂氏、この上は何處までも互ひに力を盡すでござらう、さらば彼奴を引出て劔の切味試すも一興」立上るを暫しと推留め「夜は深ても市郎兵衛が住居に近き此堤、いかなる邪魔の入らんとも知れ申さぬ、こりや平吾先へ上つて様子を見よ、意を傾して平吾は堤にひらりと飛上り四邊を屹と見廻して堤を下り聲を密め「人は一人も見ね申さぬ、殺すには屈竟の時、見張は私が致しまする」と云ふに伊織は船より出揚板接退け引出せしは哀れむべし棄若の吉なり、甘藷の縄にくゝり上られ打撲かれし小髮の疵、生々しき血汐の色も酷らしく、きつと喰しばりし唇の色も青ざめたる無念の形相、伊織は肩の邊りを

揺動かして「やい槃若、の吉とやら望み通り今日は殺して呉る、念佛唱ふるは今の中追付跡から親分の市郎兵衛も送つてやるから三途川邊で見失はぬやう待て居れ」默然たる槃若の吉大の眼潤と見開き、ぢつと伊織を睨み上げ「やい、汝や男らしくねゑ奴だなたかゝ上野の失態から自分勝手で恨み込む、ろの親分には手も出ねえで卑怯にもこの俺を不意にかゝつて引倒し、繩目の辱を見せるのみか、殺さうとさでしやがる、鼠のやうな孤鼠々々侍、へン神田上水に磨き上た清淨な此巳様、うんな鈍刀で切れる者か」いはせも果す高坂伊織は槃若の吉を引立て提へ上れば春の夜風水神の森を掠め來て、ぞつと櫻の梢を揺ぐれば、空に漲る花吹雪水の浮雲雨を、さろひてはろ〳〵と降りくる小船雨。

第十六回

かりうめの道恨も打解ればもとの水、さら〳〵と流し、楽ては露の意旨も留めず身分の高下も忘れて一人の友垣得たる心の水野十郎左衛門今日は微行に向島の花見がてら白鬚の片邊に夢の市郎が俺を叩いて氣味能き彼が談話聞て瓢の酒に香の物、長き一日を興じて呉れむと供には例の玄作爺、一人召連れて瓢然と邸の門を立出でぬ。

都鳥言問の團子も可奥しからず一提の景色も厭きたりや、傾むけし瓢の庖輕く謠曲に足拍子、花を三圍の社近く市郎兵衛が庵を尋ね、來て玄作に命じて門の戸はと〳〵と叩かすれば、人やらぬ寂然として答ふる者なし、さては留守か折惡く尋ねしなと十郎左衛

門些か殘り惜しく一層荒く二回三回續け叩けば應と答ふる聲も次第に消されて「他人行儀に門叩かずと誰かは知らぬが用があらば遠慮なく默つて入らつせい」飽まで無精の言葉、興がる奴と十郎左衛門玄作を顧みて共に打はゝゑみつ「市郎在たか身共ぢや水野ぢや花見の歸りに浮と思ひ付いて態々尋ねてきゐつたのぢやこは容易ならぬ珍客、船うぢ入來」と市郎兵衛折戸を開て請じ入るれば十郎左衛門は心もとかず快濶に打笑ひて「瓢の酒は皆なになつたが、まだ飽足ぬ酔心地、何も不用ぬが酒一つ、足下の談話を肴にして傾けたい、見ればたつた一人住居の樣子、これでは無理にも頼まれまい、「これはまた容易い御用事酒は幸ひ私の飲料のでざりまする、お口に合ぬ粗酒ではござれど、どうや今差上げるでざりませう」起行く後影見送りて十郎左衛門、晴やらぬ市兵衛郎が

けしき合點ゆかず勸むる杯受て飲乾し市郎兵衛に擬しながら「常にない元氣のなきは何か仔細のあることか足下にも似合はぬ屈托顏、春は浮立つものぢやといふにまづ一献を乾して廻されいへどもぢつと思案に暮て市郎兵衛暫し言葉はなかりしがやゝあつて首を擧げて聲鋭く「水野樣を俠兒と見てこの市郎兵衛折入つて頼みがござる」改まつたる言葉に水野も座容改めて「何かは知ぬが頼みとあらば後へ引く水野でないして其頼みの條といふは」一膝乘出て問かんとす市郎兵衛は力を得て「頼みとは外でもござりまぬが先日お宅へ推參の歸り道待合したる五六人の曲者不意に打てかゝりしにうれを對手にしてゐる中、見失なつたる乾分の一人、その行先の星はついても私が行けば血を見ねば納まらずそれでは折角水野樣の御厚志も無益となる譯、さりとて大事

な乾分一人見殺しにすることもならず、當惑の折圖らずも今日の御入来はひとお頼み申すことと云は万事穏かに済すは貴公のれ計らひ一つ宜敷願ひ上まする」水野は静かに聞ゐしが勃然として怒をなし「思ひしよりも武士らしくもなき高坂の一輩、暗の不意打さへ卑怯なるに人を捕へて連行しとは言語同断の白徒我組の名を汚す、腐れ武士人に對ひても恥かしき次第、市郎万事は呑込だこの十郎左衛門刀に掛ても乾分は明日にも送り歸して得させう辞色烈しく立上り「いや今日は思はぬ長座はや日も暮方、どりや玄作歸らうぞ市郎兵衛は引留て「折角のお越しに何の風情もでざりませぬ月には一しほの眺めもでざりまする、まづ緩々と御休息なさりませ」それに今日は御馴染の彼の光江、兄の志賀共々に參る筈彼等改めて御目通に重ねて一献差上たうでざりまする」いは

るゝまゝ座に復れば入相の鐘もの哀れに雨もつ空の早暮れて點灯頃となりにけり。

第十七回

天黒く風黒し夜色蒼茫として一堤の樹影は煙雨模糊の裏に掻消えぬ、白鷺の常夜燈の光眠るが如く、木立の奥に淋しく殘り寂寞として亂杭にあたる水の音のみ高し、遠白く闇を染抜く花の湖明りに酔歩危なく辿り來る二人の人影水に澤潟の小提灯は、水野が主從と見られたり先に進みし玄作は浮と歩を停めて十郎左衛門を見返りながら「殿御聞あり」しか怪しきあの一聲、人氣稀なるこの深更に花見殘りとも、受取ませぬ、必ず曲者いで見届け呉う、殿には暫時……、と氣早の老人腰揺上て驅行んとするを十郎左衛門「こ

りや又親爺が突飛の振舞、提灯さげて曲者に近付うつけがあるかうれ消して身共と來よ」推留られて玄作は提灯ふッと吹消し共に足音を忍ばして木陰傳ひに一町ばかり窺ひ寄る人ありとも知らぬ此方の曲者は、前の高坂伊織が一黨たゝ一人なる樂若の吉を取圍み聞く人なしと聲高々に心に任する惡口雜言こりや樂若の吉末期の水は殺害して後この川中へ、水葬禮念佛なりと百遍誦して來世は犬にでも生れて來い」突付た白刃の稻妻五更の闇を照して物凄やかて消行ん露の命、元より奥斗つけて買ばうらん俠氣の江戸ッ兒眼は瞑て自若たる觀念の臍堅めては何事の雜言も此の私語と聞棄て默として言葉もなきに、伊織はいとゝ傍近く「汝じたいうの耳何の爲に落る、かはどいふても腹立ぬか、さらばかうして呉ら土足に蹴て前に廻り、かッと吐きかくる唾は吉が面上にかゝ

れり、吉は思はず見開く眼に無念の色、「オヽ口惜いか殘念だか、せめて恨みの一言もいふて退ふ下必なれや、まだ曉方には程もあるさつさと吐して埒明けよ、夜が明けなば死出の山、亡者の旅は見苦しいぞいかに方々息の根止にかゝらうかな、飽まで哮く咧弄に堪えかねて磐若の吉、屹と半膝を立て、「やい三一、先刻から默つて聞あ、云ひたいまゝの雲嘔語、汝等ア俠客の待遇方を知ねえな、第一己等一人を五匹六匹不意懸りて縄目にあはせた卑怯の腰拔態く恥かしくもねえで口を叩くぞ愚圖々々しねねで早く殺せ、血が恐くつて刀が當られねいのか、灘の銘酒に活た肴で、肥しておいたてのお身体汝等の痩身とは品が違うわ、さあ首なりと胴なりと、氣を落付て切て見ろい、萬丈の氣焔舌端に逝り來りては、當りやうなき不敵さ、伊織は烈火の怒に物をもいはず振上る太刀あはや香ばしの

俠骨落花微塵の一刹那木立の蔭より大喝一聲、「待てッと叫ぶ其聲はうれと知るゝ水野が音聲、天よりや降りし地よりや湧きし、さても意外と呆れはて躊躇みたる高坂伊織の、肩先むんづと引掴み怒れる聲を荒らげて、「いかに高坂あれ程までに戒めたるこの水野が言葉何と聞れた、小兒に劣る卑怯の振舞、組の名を落さんれたないやさこの十郎左衛門が面上に泥を塗つたな、義に勇む一千の配下が手前、かくなつては穏便には濟されぬ十郎左衛門吃と覺悟がござる、うれなる方々も能ク卑怪に加擔しめされた、睡してだに呆ぬは足下等の野面ちやわ、切齒して焉られても、伊織は前の擬勢何處へやら身を片蔭に引きて言句も出です、水野は玄作を顧りて「玄作灯を點い、これなる若者の繩を解て遣はせと親から手を下して繩解棄れば、樂若の吉は夢かとばかり早速の言葉も出さるに

水野は近く進み寄り、背幾度か撫下しつ、「聞しに勝る天晴見上た俠骨、前より始終の樣子を見聞て、水野熟々感じ入た、是節の者が無禮の扱ひは余が顏に免じてゆるして呉い、身体は痛むか、怪我はないか、こりや玄作汝はこの若者を扶けて、市郎が家まで送り届け、能うの仔細を申せ、さて方々には水野改めて申す義のござる、身共の即さで參られよ。

第十八回

夕方頃より尋ね來し、明石志賀之助と光江が一座に加はりてより談話は愈々花が咲て、更闌くるも知らで興を盡くして歸りたる、水野十郎左衛門を送り出して、市郎兵衛はひとり澄ぬ顏を志賀之助に向け「のう明石最前からも聞たとはり、樂若の吉を隱したは、實

は水野様の指揮かとの疑かひもありたれど、さう思つたは大きな誤まりすつぱりと御心底も晴れた上は、これからは高坂を對手に談判の埒をあげずばなるめ、だが水野様の所存もあれば万事任せろと折角の御言葉今さら此方の勝手にもならず其中にも樂若の吉の身の上に万一のことはあるまいか、知ての通りの氣遣の奴故万一向ふの怒を招いて、殺されでもしては後日の祭、思へば不憫で堪らぬね、明石、巧い考案はねえかなあ、暗愁を眼に浮べて思案投首明石に問てば、明石も共に拱ぐ腕、「親分のいふ通り、深い意恨に持つ奴等叶はぬ、意旨返しに八當りで、吉に憂目を見せるかも知らぬとはいふものゝ、万更馬鹿でもねえ奴等、さう譯なしに、殺しもせい、まあ安心して水野様に、一切任しておいたなら悪るいやうにはなさるめい、光江も脇より口を添へ、「いつぞやから重ね〳〵夢

親分の御苦勞つゞきられも原因は妾故と思へば、身を粉にしても御恩がへしをしたうおもうても女だてらの出過者と兄さんの叱る故、他で見ては居るけれどいつそ切ない思でござんす、兄さんとした事が、何とかして乾分の衆を救ふてあげねば親分への義理何として立さんす御恩報じはこゝでござんすぞね」心は大江戸氣おいの流れを汲みて風にも靡かん優しげのなよ竹、猫凛として一節見する言葉の端、兄は態とたしなめて「うれまたしても女風情の入らぬ口出親分の前控えてねねえか」市郎兵衛は取繕ろいて「明石何も叱るに及ばぬ、男らしもない屈托は恥かしいわ、今日は貴女は一目おいて男が負を取すばなるまい折から表に人の聲門打叩く音も聞えて「親分歸つた、吉だ、こゝ明てくれ聲は正しく樂若の聲乙は水思鐵と直ぐに顔を見せてあまりの意外に逆詐もせねば

外には獨もどかしげに「市郎兵衛殿玄作でござる早う此の戸開けて下され」聞くより早く立上る光江、急ぎ出て外窺へば提灯の火影遠かに打やつれたる樂若の吉、傍に前刻の玄作も付添ひゐたる不審ながら戸を開けて「これはまた玄作殿も御一緒に何としてこれまでは……まづお入りなされませ」市郎兵衛は思はず土間に飛下り突然吉の手を執つて「吉歸つたか、能う無事で歸れたなさあ上れエ、足なぞはどうでも好わ、光江が氣轉に汲で出す、洗足のぬる湯も熱き人の情吉はいまさら言葉も出す、玄作の跡について踏り上れは市郎兵衛はまづ玄作を對ひ「先の程のお言葉もあれぞから早う吉をお助け出し下されうとはまだ何とやら信難い氣のいたしまする不審さころと玄作は先刻の始終を物語れば樂若の吉も進み出で「折好も水野樣の御助け既の命を取留て、二度と親

分の顔が見られるこんな嬉しいことはねゑ」いふ顔熟々と看守りて市郎兵衛「吉わづかな間に手前は甚く變れたなあ

第十九回

夢なれや花の白雲、青葉に染る空の色も碧を流す隅田の流、夏に入江の華村に風待つ夕暮の屋形船、吹けや川風の涼味を追ひて、颯る簾の陰漂る燭光、長う川水に影を曳く景色は京の鴨川に比へて、江戸にも納涼の名所と名には立ぬ

只ある片岸に繋げる小舟の中には市郎兵衛が積る憂も日本晴の涼月を盃に浮べて快飲の座に連なるは志賀兄弟に樂若の吉、中垣掘ぬ隔てなき圍座に打解ては興も進む光江が小唄武骨の一座に又得ならぬ一節の花咲せて、五ひのささめき他目もいと樂しげな

り志賀は愛嬌の片笑つくりて、盃を磐若に差せば酌は光江が勤め上手「吉さん大分に溜りましたぞゑ一つ明て親分にお廻しなれ」はゝと輕く笑ひて注ぐ酒の半を乾して下に置き樣子ありげに市郎兵衛が顏を見て「親分入間の身はどうなるか知ねねもの、殺されると諦めた此身体が、かう活潑くして所も同じ此川の船で酒が飲やうとは命冥加も明石圓等のれ隣これから長く親分と相互に助け合て親類交際をしていものだ、うれに付て親分も明石圓も私が一つの相談に乘ちやあ呉なさるめゑか」胡座組直して磐若の吉がいつになき眞面目の顏付市郎兵衛は點頭て「いふ迄もねゑ一旦俗遠か立入て詰まねゑ口を利たからには明石の上に指一本さゝせることちやねゑ、聞けば高坂伊織の奴原神祇組をポツ出され散々辱を見せられて今では勝手に雷神組といふを立て頻に我等

を跳梁ふと專ら風聞するからは、互に用心せずばなるめい、そして手前が相談は一体どんな話なんだ、遠慮は入ぬいつて見ねゑ」志賀も何かと膝向かへて「夢親分の親切にこんな、已をも見棄ないで後見をして呉ると雖有いこの言葉、此程からの心盡しを思へば假令身は粉になろうが出來ることなら何なりと思返しをするつもり私には決して異存はない親分のためになることならどんなことでも承知するゝの相談を打出して見なせい」いふ尾について光江も口添「ほんに何かは知ぬけれど親分のお身のためとありや兄さんとて妾とて何なりとも厭はせぬ程にいふて見てくださんせ」言葉を揃へて三方より問かゝられては磐若も何とやらいひ淀みて「さう改めて聞れては私も何だかいひ出悪いが相談とは他でもねゑ親分は丁度獨身者、いづれは姐御を貰はにやならぬ、うれ

には他を捜すより幸ひ、明石閣の妹御なら前方からの縁もあり、氣性は立派な男勝り、姐御と立ても恥かしくねゑ、なんと明石閣、承知をしてお呉なせい」明石は喜こばしけに小膝はたと拍ち「その事ならば此明石もかねゝ心に願つてゐたこと親分さへ異存がさくば妹お前も否やはあるまいな」問はれて有繋勝氣の光江も恥かしさに顔を背向て海や淵紅の嬌顔を袖に蔽ひて笑顔に嬉しさは包み得ず吉はさこうと乘氣の顔色「親分も今聞た通り明石閣の妹御も別に異存はない樣子、此上は親分の返辭一つ早く聞して下せい」返辭いかにといつれも其顔窺へば、市郎兵衛は暫時思案の口を開き「吉を始め皆の芳志數ならぬ此俺をうれ程迄に思つてくれるは有難いが、この儀ばかりは中止にしてくれ意外の言葉に驚ろく吉「を親分それは何いふ譯で「不束な妹で氣に入ねゐから

か……」と急込明石と吉市郎兵衛はまづと推靜め「否、やどうして開なことか、光坊なら俺の方から願つても貰ひてい位なれどそれでは此市郎兵衛は惚た女一人のために命を棄ても神祇組に栖を突いた車客な野郎ともしや世間で評判されては俠客の面にかゝはるわさ、吉解つたか明石も惡く思うて呉るな

第二十回

夏は名物の蚊軍に取圍まれて可等肥ねたる美事の身体一貫痩て蚊遣の煙に燻ばるも意氣地なの業や、いで奥州に後日の親父が雄圖を吊らひ夏草や兵士等が夢の跡に去し、矢叫を松風の聲に忍ばんも一興と、留守は万事志賀と磐若に任して係累あらぬ身の氣樂さは遠旅の悲しさを泣て見送る人もなく、夕顔這ひかゝる我家の

門、出ては再び顧みもせず、飄然として咲や山吹黄金の名所といふ遠き奥州指して出立けり。

村や何處茫々たる草野の露に臥しては、物語に聞く安達が原とは此處か面白し黒塚の鬼も出よ、押拮つてこれを肴に賞玩せんと、在吾中將が風流の跡を柴折に三十一文字は愚や、わが腰の業物試し呉れん、殊勝の剛賊は出でさるかと、奥州街道を仙臺に取りて急く旅ならぬ身は行き暮れし所を其日の宿を定め二十日餘りを經て仙臺に着きぬ、

一日を城下見物に盡して松島に遊びては飽ぬ眺めに江戸自慢の鼻を折らし外が濱風に吹かれては万里の涼を吸ひ歸途に常陸を廻りて水戸の城下へ着たる頃ははや八月の初旬朝夕の風征衣の袂に寒く、天の戸渡る雁が音に遊子の故郷を忍ぶらん秋なりけり

有繋は天下副將軍のれ膝元武を以て立つ士風の凛々しさ、綺羅の小袖伊達の細身ゑべら〳〵としたる江戸八万の旗本が華車風流にすさむ腺弱の狀に劫を沸す市郎兵衛が眼には皆がら床しさを増しぬ、

其夜は馬口勞町といふに宿を取りて明後日は江戸へと思へば夢も穏かに翌日は早くより起出て城下殘りなう見廻り宿に歸らんとして來かゝる町角、土方人足らしき十五六人、手に手に棒を振翳して一人の旅人を中に取籠め聲々にわめきつゝ何か爭そふ樣子を見るより市郎兵衛は例の氣性に他に見難くつか〳〵と進み寄りて「れいお主等何か氣に障つたか知ねねがたかゝ一人の旅の衆を捉まへて脅迫がましひ此場の狀見たからにや目を瞑つて通れぬ俺の氣性一應譯を、話して、見せい得心のゆくやうにして進せ

るから穏かに云論せど氣立たるの人足ども耳にも入れず、聲張上げ「やい何だと聞いた風の哮き方無用ぬ場所へ出しや張つて譯を話しやあ何とする」市郎兵衛はむつとして「さうさ悪はれあ汝等の素首叩き破るばかりよ、さあ落付て話して見ろ聲勵ましてきめつくれば、何をといひさま人足は四方より押取卷て市郎兵衛に打て懸るに詮方なさに相手になり輕く一人の棒かい潜り胸倉掴んで横に倒せりうれに躓く又一人將棋倒しに二三人折重なつて轉び伏したるに勢ひ拔かん元より弱き蚊蜻蛉人足、逃吠しつゝ散失たり危くならば躍り入らんと拳固めて控ねたる前の旅人、この時市郎兵衛の傍に進み出で笠を脱で擧る顏見交して打驚ろき「やゝつ手前は吉ぢやあねえか」「ろういふお前は親分か好所で出逢した今江戸では一刻も猶豫の出來ねね大事が起つて實は親方

が仙台から便では今月始め水戸へと着くとのこと故に搜して遂ねねことはハるめねと怨で飛して今着た所酒代の少ねねとか何とか愚圖り出たのが小癪に障り二言三言いふ中に立場の奴等が人勢出て來て已に喧嘩にならうとした所よろれにしても雲掴むやうな親分に偶然こゝで逢といふなあまだ明石關の運の盡ねねのだ、時に親分用せえなかれあ是から直に江戸へ歸る譯には行くめいか」と急立れば「急な吉、唐然に何の大事か知ねえがまあ一先宿へ歸つて落付て聞た上猶豫の出來ぬことなれば夜徹でも歸れば歸れぬことはねえわさ」座打拂ひて市郎兵衛は舟若の吉を伴なひてれのが宿舍に立歸りぬ

浪の音松の聲旅は悲しき三月の秋月の山越露の夜道に流石心に懸る江戸のこと敵多き志七の上に万一變事の起りはせずや、磐若は健在か、乾分は無事かあはれ江戸に何事も無れかしと陰ながら念じつゝ辿り着たる水戸の城下、三百里の雨風に洗ひ晒されし旅衣、江戸に着て脱換るに二日三日となりては、歸心矢の如く水戸も匆卒に見終りて旅宿に歸る道すがら思はず逢ひし磐若の吉まつ互ひの身の上を問ひ問はるゝことか、我顔見るより一大事の注進と叫ぶ吉の顔色平常ならず、南無三さては高坂が雷神組が雲騒ぎか志賀の上心元なし吉が能々我留守乘て長途駕を飛して尋ね來しは何さま容易のことにはあらじと騒ぐ胸を押し鎮めて急立つ吉を引連れて旅宿の奥まりたる一室に行燈も傍に推遣り膝疾合して聞けばさて、げにや大江戸の名にも障るべき一大事、吉が必死の

怒飛したるも道理なりけり「親分大事といふなあ他でもないことは矢張明石關の身にかゝることなれど大くしては江戸八百の町にもかゝる今度の出來事譯を聞て下せい」吉は咳拂ひに氣を鎮め「今度京都の禁裏樣で世の兵亂に暫くの間斷絶してゐた相撲の節會とかを再興することとなつて、此八月の十五には雲井の御庭に土俵を築き天覽相撲があることに極つて、東の大關は明石關と勿体もない御勅定聞も敢ず市郎兵衛は腕を摩り急込言葉に力を籠め「ウムーこれは勿体至極もなゝ明石が冥加に叶つた仕合せ禁裏樣の御上覽ある今古未曾有の大相撲の大關は明石を措ちやゝ他にあるめゝ、其敵手の西の方は一体誰に極つたのだ、委細いことは後にして敵手を早くいふてくれ、手に立者はねえ筈だが「所が親方西の方といふはあの肥前長崎の、それ仁王仁太夫よ」市郎

術は意外の面持「なゝにッ仁王の奴だ、彼奴ならこの前一度負恥掻た者、晴れ場所に勝負を爭ろふはどのこともねゝぢやァないかとことなげにいひ放つ市郎兵衛、吉は口惜げに腕を扼し「江戸の様子を知ねゝからそんなことをいふものゝ、親分吃驚しなさんなあの明石關はなこの御上意のある前から烈しい瘧を病ひ付どつと床に就たなりもう彼是今日で二十日位といふものは飯も碌々食ぬほどあの肥太た身体もめつきり痩てしまひ、力量どころか今では命ちも危い位ゝ、江戸中の最負の衆が種々心配して呉ても病氣ばかりには勝れぬので切齒して口惜に引かへ、敵手の仁王は此赤中から遺恨もあり、力量とても此前とはずうつと上つて今では闘西切て向ふ者もない勢ひ、ろれや是やで明石關は、なまなか病氣を推て出て土俵で負恥掻うよりと、全たく出やうの念も斷て殘念

を堪へに堪へ鳴瀬川を代理に出すことに極つたは好が、世間では樣々な評を立て明石は俄かに怯氣が付き假病を遣つて逃たのだらうといひ振す、原因を糺せばあの高坂の雷神組が、仁王の方の尻推して前頃からの遺恨を晴す卑怯な流言、憎い口惜いと思つても肝賢の明石關は、日の目も見ゝぬ今の大病、虫を殺して我慢をすれア、また其上に此頃では、あれ程までに世話を燒た親分までが、うんともいふはねえ上委迄見えねゝのは、多分明石の腰病風に誘れたに違いはねゝなゞと聞くに聞れぬ惡口を、蔭で聞てる私等の心中親分察してお呉なせい」無念の拳握り詰始終を語る吉か顏、ぢつと見詰て市郎兵衛、思慮に餘る大息はつと吐き、喰しばる齒も軋るばかり暫時無言に沈みしが、何思ひけん憤然として拱きし腕解より早く突立上り「吉ッ能く知した、十五日といへば後十日、まだ少し

の間もあるが、して其代理の鳴瀬川は何時京都へ出立するか分らねねか」思案ありげの市郎兵衛がけしきに吉は、稍、顔みある心地して、「鳴瀬川は慥明後日頃の出立、引留るなら一刻も早く江戸へ歸らねば間にあひますめねせ」「好ッ吉すぐ早駕を二挺百里一飛の健脚十人を雇つて來い、酒代は一里小判一枚急げッ」聞や否や磐若の吉は尻引からけて、駈出たり折から響く時鐘、數ふれば早や五時なり。

第二十二回

沙暗き上絃の日を浴びて夜路の露を散しながら、宙を奔る二挺の早駕えいほうの悲聲勇ましく、一里一枚の黄金の音に後を追ひて急に急や江戸街道三回駕を換て其翌日の登下り大江戸は千住の宿に至り着ぬ。

はつと一息立場に休らひ一椀の澁茶に喉濕はしつ市郎兵衛は磐若の吉に打對ひて「夜徹し宙を飛したので思つたより早く着いた手前は此處から直ぐ鳴瀬川の宅へ乘着、京都への代理のことは暫らく控へてゐてくれと條へた、其の出立を引留ろ俺は明石の家へ飛してどんな容体か見た上で一番發させて見るわ吉はいとゞ危ぶみて「親分さうはいふものゝ明石關のあの大病、無理をいふつて心配させては病の障害となならうも知れぬ慰はつてお遣なせい私も鳴瀬川の用が濟んだら直に跡から行くとせう。

先の樣子の心に懸れど鳴瀬が立てば後の祭と心殘して磐若は別れ、ひとり鳴瀬川の許へ走らせたり。

市郎兵衛は勞るゝ衰夫勞はしつ、取直す息杖砂煙はつと起て飛が

如くに本所は横綱の明石が宅へ乗着ぬ。

駕を下りて、案内もせず門の戸荒らかに引開けてつか〳〵と座敷へ通れば光江は、見るより思はずも嬉しさ悲しさ口惜しさの堰あぐる涙隠しもあえず、轉ぶが如く走り寄り「こ、これは何として夢親分好い所へ……わ、わたしは口惜うございますと身を打臥して心雄々しき光江も今は打悄れていふ言葉も知らず、衰れともへど市郎兵衛は慰さむる時にあちずば、其まゝ奥の病間へ通り「明石まだ活てるか、市郎兵衛が戻つて來た、おいさ明石、お主やまた死ねるのか」聲烈しく呼びかくれば惡寒惡熱往來して昏々として半ば正氣を失なへる志賀之助眼吃と見開きて危く半身を起し、聲もいとい打慄ひ「哥兄か、よ、よく歸つて來て呉た、今度の話や聞たでありがお、おれ心の中の無念さ、殘念さ、察して呉るはれ前ばかり病に

勝れぬ腑甲斐なく、我身で我身が口惜いわ、枕に犇と獅噛付て、しばし打伏たる頭を擡げ、涙を含んで見上る志賀の顔色見れば哀れや痩て骨立眼は窪めて昨日の面影見るよしもなきに市郎兵衛は屈瞬く顔背向て強て言葉に怒りを示して「なに無念だと殘念だとたかの知れたる病氣で以て代理を出す意氣地なしが、能く其音が吐けたものだ、今の和主が背中には、江戸八百の街々を背負て居るとは知らねゝのか、开んな弱ゝ根性とも知らずに今迄は兄弟の約束まで結んだは俺が生涯の誤まりだわ、天下の力士といふ者は土俵の上を戰場と心得、たとへ土俵で死ぬ迄も畳の上で死ぬよりはいくらか男らしいや、うれでも奴主や出ぬゝ氣か、返辭は後で聞く程に考へた上で確固呼を明るが好い、いふことあればこれ明石又來よう子」といひ棄て歸へらんとする市郎兵衛が襟、袂に取ら

れて控へたる光江は周章て引留るを振拂つて戸口に出れば、志賀は先より死せるが如く、頭を枕に推付て無言のまゝに聞きゐたるが、此時瓦破と撥起つ襖際まで蹌行出苦しき聲を振搾り「哥兄ま待てくれきつぱりした、返答せう其聲聞しや、聞えずや市郎兵衛は待せ置きたる襖に打乘り絶る光江を推退けて何處ともなく行く跡を暴ひて光江も追ひかけたり

見送つて志賀之助ぞうとばかりに身を倒し暫時身動きもせせりしが何思ひけん猛然と起上り蹌踉として危き足元踏しめつ漸やくにして庭に下立車井戸に身を寄て息も喘ぎ〳〵汲上る釣瓶の水ざんぶと頭より打浴れば飛沫も寒き五体の戦慄、ウンとばかりに悶絶して生死も知らず倒れ伏ぬ。

第二十三回

「明石ッ、明石ッ、已だ、市郎兵衛だ、昏々として氣は有邪無邪の間に叫やかゝる如く、覺ゆる志賀之助「氣を慥かに持てッ何これ式にッ男が男がと縋いて呼ぶ聲と胸に應えて簇々と湧上る五内の熱血思はず、氣付て眼を見開きむつくと身を起せば「氣付たか明石「兄さん正氣に返つてかと取縋る光江を拂ひ退け小庭に築く稽古土俵に躍り上り堂々として力足踏しめて「哥々この志賀之助はまだなねね、先刻の言葉が一々肝に銘じたわ、明日ともいはずに今此場から直にも京都へ發足し命を賭て仁太夫を土俵の砂に埋めて呉るやい、野郎共締込を持て來い、萬一負れあ生ては踏ぬ江戸の土夕稽古の仕納に、一揉々でくれる程に誰でもさあ懸つて來い仁

玉立に突立たる勢、病後の身とも見ねず痩ても松の凛たる一節市郎兵衛は雀躍して打喜び「ウムうれでこそ日本一の明石閑氣味の好い今の言葉うれを見てこの俺も胸に閊えた溜飲も一度に下て爽々したさあ是からは床上の祝ひを兼た水杯いづれが勝にも負るにも何せ喧嘩の一花咲せて命を遣取る今度の相撲こりや面白うなつて來たゞ、今夜は名殘の大酒盛磐若早速鰯を廻してくれ磐若の吉は明石の前に進み寄り「明石閑惡い時に癌の病氣も早速落て天晴の晴の土俵に上られるとはこんな、嬉しいことはねねうんなら親分私はこれからつて一走り行て來やせう」嬉しき人々の眞情、默然たる志賀之助に代りて、妹の光江は涙ながらに吉に對ひ「聞ば聞くほど夢親分を始め皆樣の心盡し何と御禮申してよいやら誠に有難うございりまする、甲斐々々しく兄を助けて市郎兵

衛共々に一室に入れ磐若は急き外の方に立出たり跡に志賀は段々と妹より聞く一伍一什磐若の吉が報を飛して市郎兵衛を水戸に尋ね當て引返して昼夜兼行に夢も禄々結ばぬ此頃の心遣ひ、閑くにつけても重きは我荷、八百八町の人々が我身に寄る樣々の批判も土俵の砂に立消て、日下開山横綱免許の錦の御旗、我賜はらねば夢の市郎兵衛始めが面上に泥を塗るにもひとしき不肖惡束な き病枯の痩腕にはなは廻る血汐あり、いかで負を取てなることか弓矢八幡心の張意地、取縋る腕もおのゝから力入りて魂は飛ぶ茲は玉敷の御庭砂清らけき土俵の上、

磐若の吉が明石床上の報知に、はつと顰そめたる眉根開いて、時の間に馳せ集ひたる大江戸に名ある俠兒の數々頭立たる面々二百人本所横綱の家は破るばかり夜を徹して飲明す祝ひの宴、明石々

々の呼聲は時の間に江戸の隈々まで滿渡りぬ、

はの〳〵と明る夜の翌朝は彌明石志賀之助が京都へ發足との噂いつとなく世に聞ゑて東海道は五十三次の驛初め品川まで見送りの俠客衆凡そ三百と聞ゑぬ、

第二十四回

夢は隱かならぬ長亭短亭、五十三次も生て再び歸らるゝとか思へば旅寢の床の枕を登て〻風聲に心を傷むるも我上ならで妹の身さりとて親亡き後の妹一人たよる兄の果敢なくなりもせば心强き氣性にも何ぼう浮世を卿つらんか有繁心憑りの胸の思憑て語らばまた、女かしと夢の哥兄の笑ひやせん、露は征衣の袖に下て、いと、感深き秋夕の哀れさを身にしめて涙の者に醒られぬ、大津の

驛はの暗き行燈の陰に志賀之助は熟々と市郎兵衛に語りける

「哥兄もう大津といふやあ京へ着のも明日の中彼地へ着ては談話もなるまい、今夜もこゝでゆつくりと談して頼んで置ていことはたつた一人の妹の身、まあさ愚痴といはずに聞てくれ、俺とて少と世間に知れた男一匹、いくら病上りの痩腕でも仁王なんぞに負る氣はねゑが勝負は時の運といふものもしや土俵で恥を取あ生ては再び還らぬ江戸の土後に殘つた一人の妹を頼むは哥兄の他はねゑ嫌でもあらうがあの妹吉が過日もいふたやうに引取て面倒を見て遣てくれ哥兄頼む、ウンと承知の一言を聞ねゑ中は俺は心が落付ねゑ何と承知か妹は引取てれ呉なさるか妹思ひの志賀之助今さら慌むる頼みの條、岩木ならぬ市郎兵衛中々に人一倍の胸の心配推包んで表は心なげに叱るが如く「えい緣起でもねゑ

そんな弱い音は聞たくもねゑ明日は京へ着といふに家のことを思ふ所か四十八手の裏表能く今から考ゑて美事な勝を取てくれ和主が一万負やうならこの巳とても生てはゐねゑ、その場を去らせず、和主を切てれもこの腹割裂くわそれに何をして後のことの顔みを受てあられるものか、勵ます言葉に志賀之助は慨然として勢込め「うむ哥兄能くいふつてくれた今のはほんの一時の愚痴未練と笑ふてくれるなこれ程までに思つて呉る哥兄の意氣込ばかりでもおれはかたずにゐられぬ譯、うんなら哥兄改めての願みといふなアその勝た暁には何でも叶へてくれるか」市郎兵衛は快く點頭て「れうさ勝た上には此命でも賦斗をつけてお前に遣うの願ひとは何なことた「願とは外でもねゑ今いふた妹の光江、否應なしに貰つてくれるか哥兄返辭を聞してくれ」暫し返答に

困りたる市郎兵衛今は思ひ決して明石に對ひ「世間の口が蒼蠅いから一度はあゝ云て解んだものゝ、さうまでいつてくれるならばいかにも勝つた暁には二言といはず、承知せう「哥兄慥に承知をしてくれたな、それで己も安心したこの上は思ひ切て命懸の勝負も出來るこんな嬉しいことはねゑ」喜ぶ明石思案に沈む市郎兵衛互ひに心を痛めつゝ、床につけども眠られず心に計るこの後の處置江戸の町々にある俠客が共に行んと進みしを我一人に引受て、明石が後見の大役は容易ならぬ重荷なり元より命棄るは覺悟の前とはいへ、明石一人はいかなる虎口も脱さして遣一つも身に傷せず無事に江戸へ遣さずば死で石碑となつても合す顔もなし開けば我等に先立て京に向ひし雷神組の奴原仁王を楯に様々の幾繰、困しめんとのみ、圖る由身一つならば何程のこと仕出すとも

一歩の後彼等に取ねど今度は恐れ多き雲の上、御覽す晴の場所にいかなる無禮の手出するやらん、さてもこと六ヶ敷や公の恐れ、私くしの紛紜、みながら懸る我上には、仰や万片の重荷なるかな兎やせん、角とうつら〳〵考へに沈みては眼は愈よ冴て睡られず何處の寺ゞ淋しく撞く鐘は九つなるべし、折からする〳〵と廊下を忍ぶ人のけはひ、市郎兵衛は汕斷なき身の屹と耳を立て、半身を起して窺ふとも知らずさやかに聽取らるゝ怪しき物音、風の聲かはた浪の音か、

第二十五回

武士は撞の音に目を覺す、當然の覺悟何條忘れてなるべき、市郎兵衛か今の境涯、素破や曲者と枕元の太刀むんづと引掴みことに望

んで驚ろかぬ平常の嗜み、拔足して障子の蔭箱元擬つて身を搖へしが何思ひけん刀は密つと擬棄て息を殺して忍びゐたり、

内に窺ふ人のありとも知らぬ曲者はやゝ近寄る此間の外暫し樣子を立聞く狀なりしが、寂鎭まりぬと窺ひ濟して、さら〳〵と音もなく引開る障子、入らんとする、曲者の襟上むづと引掴みて矢庭に其場に捻伏つ、密めく聲に力を込て、

「明石ッ、明石、曲者を押へた、灯火を持て來てくれ此方も同じく寐られぬ床の、夢現に、瓦破と撥起、「な、なにッ、曲者だッ、と行燈掻立て片手に提げ、間の襖推あけて出來るに、顏見られじと焦燥る曲者、市郎兵衛は火影にきつと透し見て、明石を近く招き寄せ、

「大抵こゝらとは思つたが、何處まで卑怯な巳等が性根、手に懸くるほどの奴でもねえ。生けては歸すが高坂に、いやさ賴まれた奴にき

つといつてくれ今度の相撲は千歳一遇の天覽相撲、我意を張て彼是と詰らぬ爭ひする場所でねのだ、もしろれでも手出がしたけあ、濟でしまつた後に仕ろ、密々しねえで立派に名乘て懸つて來いいつでも對手になつて遣る、確に傳言頼んだぞ、用はろれだけ、失やがれ引起して突放せば、曲者は蹈跟として二足三足、倒れんとして振向く顏、見るより志賀は、「やゝッ、汝は平吾とやらだな、うぬ此儘に。と立かゝるを市郎兵衛は推隔て、「いや石明何もいふな、此場は俺に任してれけ、大事の前の小事、荒立ちやあ、後か惡い。志賀之助は切齒して、「哥兄ろれあ慈悲過る、これまで崇念く我等に仇する」彼の一黨、此さゝ無事に歸したら、この後又どんな返報するかも知れぬと追はんとする志賀之助が前に塞る市郎兵衛、喰すが如く明

石を慰さめ、「これ待て石明、たかが配下の犬一匹、免したとてこの後どんなことをするものか、虫を殺すに齊しい奴を、うう大仰に罪造かへつて男の估券が下るわ、さあさ此場は無事に歸してやれ、賣る喧嘩なら買もせう、何事も京都の相撲を終つてからのこと、拙をやつて上方發六に笑はれちやあ江戸の名落、明石勘忍に損はねね今夜のことはこれきりに、二人が胸に畳んで置かう。惡々と說かれて石明も胸を據り、またも寐床にかへりたれど、人の情を思ふにつけ大事な勝負にもし負を取ば、死でも恥は雪がれぬ世間の口、あはれ首尾能く勝せ給へと、心に弓矢八幡を念じつゝ、まじ〳〵として寐もやらぬ間に、夜はいつか白みて表を通ふ馬の鈴、曉の枕に響き濤聲朝寒をさそひて獨人の寐覺冷、かなり、今日は京へ着べき日なり、あれよこれよと末を謀る市郎兵衛、晴の勝負を占ふは志賀之助

兩人はたゞ思ひわづらふ意地と張。

第二十六席

年月の兵亂に花の都も名のみに荒れし、元龜天正も今は昔となりて葵の綠御代は常盤の菊花の御章、京と江戸との御交誼並々ならず門も鎖さぬ時つ風鳴の流に波起す東山の翠色いと靜かなり、此秋は廢れたる相撲の節會を興し、畏こくも雲井の御庭に、召させられたる東は明石志賀之助、西は仁王仁太夫の兩大關、勝たば光榮ある錦の御旗下し賜はりて日の下開山の名を許したまふとの勅定、我ことならぬ京江戸の人々、關東關西互々の土地を負に、何事も手に附かぬまで心も空に氣も狂して彼處の裏此處の辻談話といへば全く東西の勝負力兩士の評判ならざるはなし。明石志賀之助は京

は錦の小路に宿を取りて、青竹の欄干嚴めしく、立つる木札に墨黑々と、『天下の力士明石志賀之助』十一字を鮮かに書かれたり。何さま勝色東に見えければ、何者の戯れにや、流石に優しき三十一文字に墨の色香ばしく或夜木札に書き流したる筆の跡は

『沖つ波ふみ〳〵ならず立越ねて
「吹きころまされ志賀の浦風」』

勢ひ付る明石の方に引かへ、仁王は頼む雷神組の高坂伊織は市郎兵衛に懼れて、忍ばしたる刺客の平吾散々の辱見せられて逃歸り、たるより、腦病風に擬勢も拔け及び難き力のはづを我から知りて處の顏役百年目長五郎といふに加勢を請せたれど辭を左右に託して引受ぬにいよ〳〵當惑の首を疾て、されば此上はと仁王仁太夫を態々大坂に下し朝夷藤兵衛といふを語らはせ傳に屆を開き

て腕撫下し綾の小路に宿を取り劣らじと勢ひを張れど、さて覺束なき勝負のはやと、互に安き心はあらざりけり。朝寒や梢太鼓の音空に澄みて、諸人が待寐の夢を驚ろかし、愈々八月十五日勝負の判れん其日とはなりぬ、志賀之助は朝より水垢離に身を淨め、心に念ずる弓矢神、我一身の勝負は、人の上にも及ぼすと思へば、心から緊るが如き心地踏試むる力足に、一寸の緩びもなし、市郎兵衛はまた、うれにも勝りて、心の心配、我勝ば首尾能くは江戸に歸さぬ彼等の心、もし負なば我いかで錦の御旗長崎の果まで持行すべき、いづれにしても我身にふりかゝる大事、仕終せねば江戸は三百の俠兒の顏に泥塗にぴとしき恥辱、ゆめ心許さぬ今日一日命はもとより暫時明石に預けたり、勝よと願ふも我の爲かは。心は同じ仁王の方にも、一度頼まれしからは片担腕てどこまでも張通さん期夜藤

兵衛思ひは異なれと高坂伊織等も、素破といはゞ刀の手前今度こそは逃も得ならじと決心の臍を固めて氣配怠らず搆へたり何となく穏かならぬ双方の様子、萬一大事惹起して、畏こき邊の御心騷がせまつるやうのこととなりもせば、我身の上ともならんづと、所司代板倉周防守よりは、人を兩方に出してうれとなく警護すれば いよ〳〵目を側つる京の人、もし喧嘩の起らんには、昔取つたる槍提さげて久し振の腕試さんとひとり喜こぶ浮浪人もあり。秋の空は果なく澄て、秋風は赤白の吹流を靡かすも勇ましく、堂々と打鳴らす太鼓の撥音冴て洛中洛外に響き渡れり、濫には入られぬ町人の身口惜しきもせめては其最寄に立て、勝負の模樣なりと聞て、心慰さめんとてか朝より詰かくる京は内外の見物、四條三條の通まで何となく賑はひ立ぬ、時刻來れば明石志賀之助、仁王仁太夫、後見

には夢の市郎兵衛、朝夷藤兵衛、互に別れて東西の御門よりしづ〳〵と御庭深く進み入りぬ。

第二十七席

須彌四天を象る四本柱、土俵の二十八宿に天地の精氣をあつめて茲呼吸の呼吸に些の邪念も留めず勝も負るも一代の晴業武士ならば戦頭の氏文なるべき呼出奴が呼上る名は次第に進みて、はや西へかゝる夕日頃、未曾有の見物、今日取組の花なる東は武藏の住人明石志賀之助、西は肥前長崎の住人仁王仁太夫と、高らかに呼上る聲につれて、東西より土俵に上る兩人の力士、並居る雲の上人、腕摺合ふ音さやめきて處がら有繋やんやの聲々こゝろ立てぬ、握る拳も汗ばむばかり、勢はひ龍て見入たり時の行司吉田專右衛門、大紋

烏帽子、殿そかに、しづ〳〵と、上り立ち須彌の軍配に眞紅の紐をさばいて左手に握り右足を引て小腰を屈め、しばし息をば窺ひ居たり場内森と、靜まりかへりて、針の落るも聞分るばかり。呼吸をはかつて專右衛門、軍扇風を起てやつと引くや突立上る明石に仁王、一は痩果し雪の肌、力ありとも見ねざるに、仁王は拔群の丈、赤銅の如く黑く鬼をも組んず節くれ立し兩腕には、げに鼎を扛む力あり て他目强氣なるに、いづれも勝負を心に定め明石の負ひを危みて惜や惜やと、咳くもありけり。見る者組む者も、ともに必死の志賀之助と市郎兵衛、負けなば生て再び歸らぬ江戸、錦小路の旅宿に美事痩腹割さばいて、人々が恩に謝せんと、決心の全方擧てゐい〳〵と揉合へば、もし勝はとて朝夷高坂等、よも無事には歸すまじ、さあらば明石の身危し、跡は我身の引受て、喧嘩はもとより此方の覺悟も

し負けたらば我から進みて、錦の御旗を途に奪ひ、狂ひ死に死ぬまでも、得こそ長崎の果に持行せじと、血眼になつて見詰る勝負のはどさて心懸りなり土俵の上には今必死の揉合、奇を出し變に應じて四十八手千變万化、志賀之助はいかに心は勇む共病後の身弛む力の隙に突入仁王は明石を引結んで、ねいやとばかり差上たり、驚ろく市郎兵衛は、ぐつと一膝乗出て處憚からぬ大音聲、「あ、明石ッ仁王の方は書こびの餘り、思はずしたりやしたりと褒る暇、矢聲と共に擲つけられし志賀之助、あはや土俵に顔埋めて、盛名散々となつて砂の上に消えはつるかと思ひの外、無子柳に點する早速の早業ひらりと空中に飜へりて落ざまに仁王が胸の邊はたと蹴付て土俵の中央に突立ば、蹴倒されたる仁王は其まゝ生死も知らず俯伏たり、軍配はもとより東へ擧りぬ。人々のどよめき、おのづから

鄙霜を破りて、最上殿下一樣にざわめきぬ、無念の眼を睜る朝夷藤兵衛。「明石待てッ。」と一聲叫んで、ひらりと土俵に躍り上れば、素破大事と吉田專右衛門、大手を廣げて立塞る、後ろより二三人ばらゝと抱留て、樣々にいひ慰さむるに、無念を堪へて引退りぬ、嚴そかなる式ありて日下開山横綱免許の名譽の錦旗、志賀之助の手に賜はれば、恭々しく押頂戴て、土俵を下る志賀之助の、腕をしつかと握る市郎兵衛、涙流さんまでに打悅こび。「明石、能く勝て呉たなあ。志賀之助は改まつて、「これといふのも、可兄の力添、已はまるで夢のやうだ。」相誘ふて御所の御門を出れば、名殘を響く檜太鼓勇ましく夕暮の空に音を殘し、立集ふ京の人々、明石々々と最負の呼聲時のまに洛中洛外に滿渡りぬ。やんやの聲に迎へられて志賀之助に市郎兵衛錦小路の宿に立歸るや、聚若の吉に意を含めて、密に仁王の樣

子を探らすれば憐れや仁王、打所惡かりけむ宿に就より息絶て、つひに歸らぬ人となりしと注進、聞けばさすがに志賀之助、兩眼に涙浮べて、敵ながら惜き力士を殺して退ぬと惜は、市郎兵衛は腕組して。「これぢや愈々、先方の出方は烈しいぞ、吉一寸耳を貸せ、ナ、呑込んだか。と何事か打呼やけば、樂若の吉は心得顔に、急がはしく出行きけり。

第二十八席

明石勝は強て我からは好まぬ喧嘩、上方數六の三文奴が、やけ腹の口惜まぎれに、賣つくる喧嘩買たりとて江戸への土產談にもなるまじ、さりとて敢て逃やうとはせぬ男一匹よし無勢なりとはいへ二尺三寸無反の剛刀腰にあり、いやさと胸は据ても懸念なは京都

の俠客金神長五郎ろの名は兼て聞く關西きつての古顔もしや敵に就て一肌脱ば、事愈々大きうなりて、可惜罪なき人の幾人欲ふもなき命も貰はねばならぬ時の勢ひ、かひなき殺生は我好む事にあらず、ことに粉れてまだ挨拶もせぬ金神の許に、此方より音物持たせて、素知らぬ顔の中立を頼まば、義理には敏き爺のこと、よも一歳甲斐なう騒ぎ立ちもすまじと、委細の口上を萬事樂若の吉に含むれば、吉心得て京は東山の片邊、金神が隱宅に訪づれけり年齒古稀を過ても、心は若やぐ金神の長五郎、ことの出入に顔欠さぬ關西での大親分、手を拍かば集まらん何百の乾分の世話だけは早や夏蠅なりぬと、跡は取纏めて東山のもとに風雅でもなき隱居の樂寐も時、には覺されて引出さるゝことしば〳〵に、其名は誰知らぬ者なき白髮爺京の名物男とはなりぬ。釣瓶落しの秋の日影短かく今日も

暮れぬと入相の鐘に、心をつかひしは昔の夢、閑散の今となつては小窓に東山の暮色を賞て、歌思ふ風流のすさびもあらぬ身に、いとゞ無聊の煩杖つきて、歸鴉を數へて退屈さ、好き談相手もあれがしと思ふ表の戸口に聞なれぬ男の聲。「御免なさい、金神親分のお宅は此處でございませうか。長五郎とは已だ、誰だか知ぬが用とあれあ遠慮は入ねね上らつせね。まだ灯火もつけぬ薄暗の一室に、躍り上れば長五郎。「ねつと待な、恰度奴等が居ねえので、まだ灯火もつけずよ、遠寄は兎角物事が面倒、そこらに火打がありはしねねか、一つ若いの頼むかのう。誰彼の差別を置ぬ老俠の無遠慮、中々に心の潔白さも見ねて面白しと、磐若の吉は心に思ひつゝ四邊探探りて火打箱尋ね當つ、燈を打出して行燈に燭せば長五郎は火鉢と、共に膝推進め、「此邊には見馴ぬ人、一体何で

ざられたぢや、用の次第話さつしやれ」磐若の吉は始めて口を開き「私は江戸の夢の市郎兵衛が乾兒に、樂若の吉といふ卑吝な野郎親分への用といふなあ、外でもねね今度親分が明石について此地に上つたことの始終は聞ても知つてお出でなさる通り雷神組の高坂といふ奴と、前方からの張合から病氣に困しんでた明石をば無理に起して今日の勝負に尾首能う勝はしたもの、對手の仁王は打所悪く、とう〳〵失なつたとの噂、さうして見れあ、かねてよりの遺恨はあり、此まゝに濟す、奴等ぢやないと親分初めがうの用心就ちやあ卑怯な高坂等此上にも金神親分に加勢を頼みにくるは必定さうなつた日にはことが大きうなり、いらぬ人死も出來る道理噂さに聞た金神親分よもや悪い加勢はなさるめいが一應御挨拶申してこいと使に立た私の口上はこれつきり、親分能う呑込

でおくんなせい、これはほんの御挨拶迄の進物笑つて受ておくんなせ」撓ず慇せずいひ終つて進物を前に出しぢつと長五郎が樣子を窺がへば金神は白髮頭かきなでゝさらに念頭にも留ぬが如く呵々と打笑ひて「あはゝゝゝ若中は切たりはつたりが面白うて隨分無理を行たものなれど此年になつては引つ込思案歳はとりたくねいものよ、今となつちやあ若い人が羨やましいわ、あはゝゝゝ、見りや立派な男衆充分腕を磨きなせえ呉る物とは何か知らぬが折角なれば貰ておかう、何れとも就かぬ言葉の端々心に點頭樂若の吉「これや親分、邪魔しやした、家にも色々用もあれば私ちはこれでお暇申すと起を敢て留もせず、座りながらに見送りて「歳をとつては寐るのが樂しみ、うんなら若えの、歸んなさるか聞樂て戸口を出れば夜風さつと門の松に鳴て天心に澄む三五の月、京

の町々や、いつこ茫として夢のやうに淡し夕靄流るゝ加茂の川面は黑ずみて湖墨に畫ながしたる如き三條の橋影、江戸にはなき京の景色はまた格別の眺望心なの身にも感ずる天然の活畫、思はず恍惚と見入る前方より此方へ來る二人の人影は誰。

第二十九席

られとは答へねど神金長五郎の心の底れはかたは心に悟りて歸るさの一本道、彼方より來る二人の人影、もしや高坂にはあらざるかと小蔭に潛みて窺へば果して近づく一人は伊織一人は慥かに平吾なりけり。

さては必定金神を訪はんとなるべし、ごとの序に其跡踪て此の樣子を窺はんと遣過して後より忍び〳〵に跟ゆくとは知らぬ二人

は聞人なき夜道と心許して打語ふ狀なり幾回となく失策ばかり頼みに思つた仁王奴はまたしても情けない負恥を晴の土俵で見せをつたのみか人聞わるい不体裁な死樣もう此上は金神を味方に引入れ花々しく喧嘩せうにも無人と見せても市郎兵衛がことよも用心せぬこともあるまい、何につけても小憎しい彼奴先刻もいつた通り金神の挨拶次第で今夜の中首尾能く手前殺害して來い先度大津のぶまもあれば油斷のないやう氣を付てすつぱりと遣て來い」といふは伊織の聲平吾は尻込む如く「仰せではござりますれど、一筋縄ではゆかぬ市郎兵衛いつろ總掛りに手を合せ推し圍んで討取た方が大丈夫かと思はれまする」元來未練の不覺者遣そこなへば命ちの上……伊織は聲荒らげ「卑怯者奴、又しても辭みをるうんな心なればこそ先夜の不覺も取つたのぢや主の命に

逆らふといふのか」辭む平吾推付る伊織聞澄して槃若の吉につこりと打笑て跡ゆけば金神長五郎が家の前伊織は平吾に命じて門はとしく と叩かして二聲三聲音なはすれど人やあらぬか寂然として返辭なきに氣をいらちなほ烈しく叩かずれば、欠伸にまじる金神が聲「誰だ、誰だ夢にさはるは靜かにしなせへ、もう寐たからには起るが面倒、用があらば外から怒鳴つせゑ、でなければ明日の朝のこと」顏見合して呆れた伊織と平吾無性にも程のある小面憎き振舞とむづとしたる伊織は聲張上げて戸口に寄添ひ「天下の直參高坂伊織ちと頼みの筋あつて態々音信たに立て迎へぬとは無禮でわらうず權柄にきめつくれば内には能とらしき鼾の聲のみ聞えて出迎ふる景色もなきに向腹たつたる高坂伊織、「重ねくの無禮者能くも武士を辱しめたな、此上は問答無益後日の祟

を惱るゝな」散々に哮きちらして足早に立去たり、跡見送つて槃若の吉路を達へて一散ば馳歸つたる錦小路の旅宿には市郎兵衛待構へて「槃若か遲かつた金神は何といつたよも先方には就はすめねな問ひかくれば槃若の吉はほつと胸を撫下して親分金神は大丈夫何方にもつきはしねへが、親分が云た通り歸途で高坂と平吾の奴に出逢た「なに高坂に出逢たとうして跡を跟て行たか「ウム跡を跟たら矢張金神の家侍風を吹したので門口からぼつ返されたが、好つたが親分い、ことを聞て來た」と聲を密めて今夜あの平吾の奴め忍んで來るかも知ねねゝ、途中で聞た話しにや、何でも今夜親分を亡ね者にしないぢやあ思ふやうな喧嘩が出來ねえと二の足踏での密々話し用心せざあなるめねせ」市郎兵衛は意にも掛ぬさまにて「さたしても奴等の手出小供見たいな夏蟬やつだ、好は勝手にさして置け、なれど已はどうでも好が心配なは明石一人れい吉手前に頼みがある、決して否やをいつてくれるなよ」故たまつたる市郎兵衛を、不審げに槃若は見て「親分なに私に頼みとなんだかは知らねねが、念を推さでもねね出來ることならいつてくだせね「頼みとは外でもねねが、あの若石を今夜の中にこつうりと立せるつもりついちやあ手前に頼みてねは已に代つて明石をば江戸まで送り届てくれ跡は已が引受た心配することはねねから」槃若の吉は呆れ顔「な、なに私に明石關を親分お前は此敵地にたつた一人で居殘んなさる心算か、うりや親分承知は出來ねねとぢり〳〵膝詰寄ぬ

第三十席

さらでだに小勢の我等明石と我とを除かば殘るは親分一人のみさりとは無法の言葉やと親分思ひの磐若が、あきれかへりて市郎兵衛の顏打眺め、てればかりは受引かぬる心の色嬉しきながら俠兒の意地、明石無事に歸さずば、勇みては歸れぬ江戸の土地、手並は知たる高坂等よし何ほどのことと仕出すとも、其時は其時の我に覺悟ありと心定めては騒がぬ市郎兵衛磐若の吉を推なだめて「これ吉多寡の知た木葉野郎が騒き立たとて、案じるほどのことはないわさ、それよりも大事な明石の身に就一つ付てもいひ譯のねえ已が身には心配せずと江戸まで送るその大役頼むは手前の外にはねえ、跡のことは氣にかけずと、うんと一言承知をしてくれ、さだ

老廣ねえ市郎兵衛、奴等の任意にはさては置ぬ、吉、何にもいはずに承知してくれ」噛でくゝめる市郎兵衛が言葉吉はしばし思案に迷しが思慮に深き親分のこと、それには何か策もあるべし、敵にも足らぬ我を頼みにしてこの大役を託せられたる上は、辭むもなまなか卑怯と思はれんも遺憾ときつと決心の頭を擧げ「親分解つたもう此上は何にも言ねえ、明石關は私が命にかけて無事に江戸まで届けやせうさう決れあ一刻も此地に居るのは險呑な譯今夜はから出立し、伊勢路を取て歸りや大丈夫して親分明石關はもう承知はして居るのか市郎兵衛は喜こばしげに「ウム吉能く承知してくれた、これで已も安心して跡の形がつけられる明石にやあまだ談さねねが何と云ても承知させざア已が江戸へ顏が立ねねおい、吉手前烏渡呼できてくれ吉は急がはしく起て出行く程なく志

賀之助引連れて座に復れば志賀之助は心に懇し今日の相撲も首尾能く勝し心ゆるみに病やゝ起りて起居もいと懶げなり市郎兵衛は改めて志賀に打對ひ「和主を呼だなあ外でもねゑが江戸を出るから後見となつて、江戸中の親分から頼まれた和主の身躰、まづ首尾能く勝負には勝たものゝ高坂等の執念き祟り和主が居てはあとの已までは自由な働らきが出來ぬといふもの、此は何にもいふはねゑで前へ江戸に歸つてはくれめゑか、さゝうういふのは無理ではないが折角立る己の義理背くはかへつて恨みだせ、今吉にも能く含めておいたれば温なしく歸つてくれ不意の呼立、何事ぞと來て見れば嫌耳に水の歸れとの勸め、明石何と答へむにも煙にまかるゝ思「哥兄ろれや餘まり無理といふもの、一旦兄弟の約束をしたからにゝ生死を共にするのは當然だ、兄一人を敵地におい

ておれはどうして歸られねゑ、ろれば、かりは許してくれ」義に堅き志賀之助決色こめて聞ばこそ、市郎兵衛は困じはてさ〳〵に說勝す心の試聞けば明石の心もくづ折れて、後々のこと堅く念を押して、漸うにしてうの意に從ひぬ。

人目を忍ぶ菅笠に旅裝束も輕々しく裏口より出行く志賀と吉、霜を蒔くが如き月は中空に懸りて夜深の風いとゞ身に染むに、市郎兵衛は庭に下り立て見送りながら「明石ろんなら道中氣をつけろ吉能く頼んだぞ」立別れうげに志賀之助も磐若の吉も市郎兵衛に寄添ひて「親分いふまでもねゑけれど、無理な喧嘩はしねゑでくれ、江戸でろんなら待て居るぞ」磐若の聲は打曇れり志賀之助も名殘を惜み「哥兄折角あゝいつてくれたので、先づ歸るは歸るものゝ氣懸りなは跡のこと、出來ねゑ堪忍も我等の爲、どうぞ堪へに

地へてくれ」市郎兵衛はわざと高らかに打わらひて「大丈夫、跡は巧く引拂ふておつゝけ江戸で逢はれるのに、うんなに沈むとはないわさ、吉、さつさと行ねえか」はげまされて志賀と吉、見かへり勝に行く後ろ影見送つて市郎兵衛はつと安心の胸撫下しぬ。

第三十一席

辭び明石を磐若の吉を裏口より密かに落しやりて千斤の重荷取下したる心、地の市郎兵衛深ゆく夜半の行燈の陰に思ひめぐらす此後ち處置借からぬ命とても我から好むで彼等二才の手に乘るのは馬鹿らしの骨頂世間の嗤笑ひとならむも耻かじ、さりとて蜘蛛の網のしらねく我身邊に若纏ふ高坂の翠よも手を袖にして見ては居まじ、どうせ一度はない命ちならば面白く乘て異う見ね透

たる蟻の膽玉あつと潰させて遊んでやるも時に取りての一興それ〳〵我に考がへありと、不敵の市郎兵衛にこりと笑を洩しぬ。

霜氣を帶びて冴わたる鐘の聲、指折り數へて市郎兵衛、何かひとり打點頭つゝ行燈の火影を暗うなし枕引よせて身を横たへしが根倦れたる身の眼早く順て前後も知らぬ如く何の邊にや落つらむ夢もいとど安すげなり按摩の遠笛辻を折れて夜はしんと靜まりぬ。

ちる露か風鋼るゝか庭外の竹籔ざわ〳〵と音して敷松葉の小庭しと〳〵忍ぶ曲者あり、提ぐる白刃月光に閃めきて窺がひ寄る雨戸の外、耳をつけて聞澄すは市郎兵衛を覗ふ曲者なるが、刃尖を内に突いれてこぢ明むとする雨戸は怪しやする〳〵とおのづから明きてぬつと顏さし出せしは夢の市郎兵衛なり、ぎろりと一目睨め

つけて「平吾か手前の來るのを待て居たのだ」低くして強き一語重ね〳〵の吐胴拔かれて早速に切込む勢はひもなくぢり〳〵と後ろにしさりてはや卑怯の逃腰「逃げるな野郎、殺しはしねえ」氣を落着ろ、いふて聞するがある、下拙に動くと聞ねえ」悠然と板金剛を突かけて庭に下り立ば、さらでたに怯たる平吾、逃もならず引もかなはずへた〳〵と地上にへたばりて市郎が樣子を窺ひ居たり手に寸鐵なき市郎兵衛の狀、殺意含めりとも見えされば平吾いさゝか心を安んじて恐る〳〵見上ぐれば市郎兵衛は平吾を尻目に見下して「やい平吾こないだからの、蟲骨折、汝あ良主人を持たなあ汝等の頼た其腕で已等に指でもさゝうとは命ち知らずの無理な希望、いくら主人の頼附でも命か欲くば止しろ、手を下すにも足らねえ汝等今度も助けて歸して遣からこれに懲てこれからあ及

ばぬ望みは斷てしまね、それでも手出がしてえとならば、いのでも對手になつてはやれど、人の寐込を覗ふやうな卒呑なことあ中止にして、臆しはしねね明日は早朝、同勢はたつた三人、明石と巳と乾兒一人この地を發足して江戸に歸る道中は長え五十三次、何處でも所は選ばぬ、ゑから男らしく立派に掛つて來い、いふことあるれつきり忘れねへやうに確固と高坂に傳へてくれ、用は濟だ人目に掛らねね中さつさと歸れ、犬に吠られてかびねるなよ、汝あ命ち冥加か奴よなあ」斗大の膽一たひ据ては殿虹を吐て眼中に置ぬ高坂の一黨、明日の出立を我から名乘て三人といへど實は孤身、衆敵の大刀襖に躍り入り、血の雨降らせんず心の覺悟、兎の毛の先ほども顏色に現はさず、白刃持たる敵を前に据て平然たる市郎兵衛げにや大江戸に俠兒と歌はれて心の花の香ぼしき江戸ッ兒魄、將師の

命は變らるゝも捨はれぬ心一つの置所、進退去就ただ義と意地の二つにむり

散々の恥辱受ても返す言葉なき平吾の襟上むづと引掴んで裡木戸より外面に突放しはたと閉切つて市郎兵衛悠々と床にかへり夢も驚かす鼾聲曉方まで絶ざりけり

第三十二席

朝日大文字を射て東山のあたりは薄霧につゝまれたり内裡の御屋根高くたち舞ふ鳶、金鈴をならして、朝晴の空長閑に謡ひあしたの靜かなる朱雀の大路見渡せば柳さくらをこき交せけむ春の錦のまたさらにちるや、やなぎのはろ〳〵として秋は櫻の梢疎らに老けぬ。

誰どや街頭に踞まづきて内裏ふし拜む怪しの男、やがて立上る姿たゞ見れば大刀闊の木に帶びて眞深に冠る熊谷笠に面を包み、黑繻子の羽織の脊には金字を以て明石志賀之助の六大字を縫出したり、怪しの形裝不思議の風体、戰國浪の武士が主求めての歴遊とも見ゆるに、鎧櫃擔がぬがまだしもの事。

怪しの男は嚴らしたる肩に風を切りて大道狹しと歩み行く後ろ遥かに隔たりて、見も隱れに跟ゆく二三人の曲者ありけり、時は朝なり、普通ならぬ男の脊を見れば、金字の六文字、讀めば明石志賀之助、さては噂さに高き日本一の力士、敵多き中を身一つでさても勝太き振舞や、今に大事の起るは必定血の雨降らんは三條邊、こは面白き見物なりと、簇がり寄る京の人々色々に評し合て附ゆくを、他目も振らず悠々と手に持つ扇子に大刀の柄元叩いて柏子とり、小

聲に謠ふ熊坂の一節身も世に忘れたらんが如き不敵さ、風はそゝや何處に吹といひたげなり、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

昨夜忍ばしたる平吾は明れども歸り來ず、惡念の胸騒がして、一夜を明したる朝の門いろがはしく叩て驅込たる乾兒の注進聞けは大膽には明石志賀之助の一行いま發足の途にありと寐耳に水の注進さらに腑に落ねどあつと呆れて朝夷藤兵衛を搖起し、高坂伊織は乾兒いろがし立て、跡を慕ひ追付たる三條小橋見れば志賀之助の後影、今しも橋の中央にかゝれり。

向ふ鉢巻と停かけの用意仰々しく驅付ればこはうも敵は一人なり、夢の市郎兵衛はいかにせしと思へば有繋に心の危ぶみ、容易は

手出もなさず吐膽拔れて呆れ居たり。

清沙を蜘蛛手に流るゝ鴨の流れ、東山朝の翠秋晴の空に隈立て山光水色兩ながら今朝は晴々として霽けるようなり、京は風色の名所これも名殘かと思ひ入りて、橋の欄干に肱をもたせ、この大敵を前に据ゑてから素知ぬ風情の景色に見惚るとは已れどこまで深き膽玉うど重ね〳〵の意外に高坂伊織張込し擬勢を折られて互ひに顏を見合せたりしがやがて歩み出る明石を見るより堪りかねて後ろより「明石待てッ」と呼び掛けたり、明石は聲の通せぬ如く立停りもせず行きかゝるを、墨みかけて二聲三聲、素破喧嘩よと左右の人立どや〳〵と、分れし中を高坂の一黨四五十人橋板とどろに踏立て喊の聲に氣を勵まし、續けて呼び掛る高坂伊織「卑怯ろ、明石逃げるのか」此時始めて歩を停むる怪しの男「何を騒ぐ小

童奴、已の面を御存じねかし深網笠をかなぐり棄て、顧ゐつたる横面覗けばこはいかに夢の市郎兵衛なり「やゝつ已は市郎兵衛だな。

第三十三席

東山の片陰に閑居の百年目長兵衛が耳にも入る天覽相撲の噂さ東西おの〳〵勢を張りて穏やかならぬ素振に腕拱ぬいたる思案の胸こは容易ならぬ大事ぞ勝も負るも互ひの紛紜、いづれ喧嘩になるは必定のことわが目前に血の雨降られては隠居の爺とて默つても見て居られまじ、ようでもないこと仕出來いて、またこの爺が出ねばならぬか、と腹心の乾兒歩らして世間の風評窺はすれば非曲に西にありて私怨を晴さん雷神組の後楯頼まれて大坂の朝

夷も後援となつたりと聞より長兵衛白髮首傾むけて、困つたと叫びぬ、藤兵衛は我引立し大坂の侠客、市郎兵衛はその名かねて香はしき江戸の侠客縁よりゆかば我力入れ上ならぬ西は正道踏ぬ義にはづれたる行なひありとすればみて見ぬ跡の喧嘩の場所に飛込で我が一生の名残なる納まりつけて双方ともに怪我あらせじと思ひ定めたる所へ磐若の吉の頼み不言不語に内心を匂はせて歸したるより暗に万端の用意具へて今にも喧嘩起るかと待つ翌朝飛が如く急ぎの注進聞けば三條邊りにて喧嘩起らんと町通る人の噂さ、と半ばも聞かず百年目長兵衛すつくと立上つて大音聲に「野郎等例の支度は出來てるかすぐ出掛けるのだ急いでやれッ」老ても氣丈の鉢巻に乾兒の若を怒鳴ちらして支度の用意をいろがし立たり。

見し玉簾の中やゆかしき、かなぐり棄し編笠の主は志賀之助なら
で思ひも懸ぬ夢の市郎兵衛大眠かつと見開いて三條小橋の中央
に突立たる有様、あらし世の物語に聞く、燕人張飛獨騎長坂坡に立
て魏軍の百万を罵しり崩せし面影あり、威勢に推れて高坂伊織た
ぢ〳〵と二歩三歩退ぞけば有摩に耻を知る朝夷藤兵衛つゝと一
人進み出で「弟分の仇太夫を蹴殺した志賀之助、命を貰つて弟分
の仇を取ふと來て見れば思ひの外あ汝は市郎兵衛、そんな機器は
卑怯だぞ」市郎兵衛は呵々と打笑ひ「あはゝゝゝゝゝれあ近來氣
の毒な明石に用があるといふならば前からいふてよこせば好に、
うちとは知ず、明石は昨夜江戸へ歸りてしまつたわ、けれども折

角賣る喧嘩なら辭退はしねゑ已が買はう」已に覺悟の胸三寸何態
ろくべき我や俎上の鯉、面白やこの三條の橋に、大刀の刃先つゞく
かきりは冥土の道連つくり、死花咲して上方者の目を覺さんいざ
や掛れと扇子に拇元丁と叩いて冷やかに藤兵衛を睨まゆれば敵
なから天晴俠客、よしなき頼聞入れて、緣恨みもあらぬ人と意氣地
の張合思へは爲さでもの喧嘩沙汰と悔れど今は甲斐なき成行藤
兵衛に對ひ「さういふからにやあ明石の代りに命は貰つた覺悟
をしろ、やい野郎等已と勝負がつくまでは指一本でも手出しはす
るな」呼はつて大刀の鞘を拂ひぢり〳〵と詰寄れば藤兵衛はさす
が俠客と市郎兵衛心に感じ鯉口ひねつてこれも亦一歩しさりて
身攝へたり、卑怯の高坂は慮したる心に危ぶみて、掛れ〳〵と自か
ら先に一刀抜きそばめて進み寄りぬ。

あはや忽ち修羅を現じて水清き鳴の流れ血汐の色に濁さんかと焦へる見物思はずわつと逃のけて、堅唾を呑む折から俄かに後ろの方驅け立て卒々と烏く牛の聲つづいて聞ゆるに何事ならむと橋上の人もしばし刀を控へてひとしく顧へりぬ。

第三十四席

怪しき牛の鳴く音に人立どやや〳〵と左右にわかるゝ中を引込したる一臺の牛車、上には百年目長兵衛が一代喧嘩捌きの仕納めに老ても洒ぬ聲高く「待つた待つたと叫びながら京名物の白髮頭群集の中に振立て、夢の市郎兵衛、朝夷藤兵衛が振翳す白刃の間に恐れけもなく乘入れたり、更氣立たいづれもなれば、止まるべくもあらぬ刀の手前も邪魔に入れしは長兵衛といひ、殊に目前に寒か

る二頭の大牛に押隔てられてはいかむとも詮術なく引下りて藤兵衛は「折角老父さんが止に入つてもかうなつては意地と意地血を見ぬねでは濟さぬ喧嘩、此場は引てお呉なせね」市郎兵衛も車に手を掛け「志ざしは嬉しいが今どなつては留らぬ張合目を睨つて引いくだせね」互ひに急立雨人を押しづめて長兵衛は「いやさうはいふもの出たからにあ引かぬ、百年目長兵衛顏に免して此鉾が言葉を是非聞てくれろれでもたつて仕てね喧嘩ならもう死際に近ね此身體美事咬んだろの上で何とでもするが好、目がある中はどうあつてもこの場は決して引ぬね丁簡老人は氣が短けねわ何とぞ早く極てくれいひ出ては後へ引ぬ俠兒魂車の上に身を擡へて命投出したる覺悟の仲裁、もとより好まぬ市郎兵衛藤兵衛も同じ心解るもはやく顏見合して「市郎兵衛、和主はなんとか

もふか知ぬが仲に入つた百年目親分の顔を潰してまで我を張るはあんまり大人氣のねゝ仕方、已にやゝ今は異存はねゝ和主の返辭が聞てゝものだ」市郎兵衛も顔和らげて「もとより買たこの喧嘩、賣人が嫌だといふのを强ておればかりが意地は張ねゝ、この場は、万事百年目親分に任さうはどにどうなりとして下せゝ」先刻より傍へ控え居たる高坂伊織、こは容易ならずと暗かに朝夷の袖を曳ば振拂つて長兵衛に對ひ「父さん今も聞た通りこの場はお前に任せるから万事宜しくやつて下せゝ長五郎はたと横手を拍つて「これで已も安心した、有難は聞ゝた俠兒衆、能くこの爺が言承知てくれたこれを冥土の土産話に、已あいつでも死ねるといふものゝうんなら是から引返して手打の式を濟してから歸るなりどうするなり、一まづ一緒に來てくだせゝ」刀とるもに納心、すまぬは一

入高坂なれせ、かくなりては兎角の口出惡ろしく、面腰らして此々にまたも祇園に引返せば百年目長兵衛が一代の盡力に召集めたるは京大坂の名ある俠客の數々汲交す杯に遺恨偏執を忘れて取交したる一札には

覺へ

以來三府の達衆俠客たる者小事を挾み交を破る可からず今日以後壁つて兄弟水魚の交可致候事爲後日三府顔役立會の上相定め候一札依而如件

寛永二年八月十九日

立會人

江戸　夢の市郎兵衛

大坂　朝夷藤兵衛

第三十五席

歸れとて歸らるゝ義理か兄様としたことが能うれで心が濟むだものと、先に歸りし志賀之助の胸倉執までに散々の恨言聞されて志賀之助、我ながらの腑甲斐なさを感ずれば妹光江の顏見るに恥かしく、磐若の吉と首鳩めて、今日か明日かと向島なる市郎兵衛が宿に兄妹ともく待あくみしが今日は朝より所用ありとて出たるまゝまだ歸り來ず、暮るゝは早き日影は、いつか西様に薄らぎぬ。

花は萎とゝとも萎みたる朝顏の垣根淋しく故意となるらぬ自然生の菊五六本の花もやゝ小さうなれり、隅田川波の浮霧はるゝ疎には下紐の月影ぼのめきてうら枯るゝ荻の上風憂を身にしめてはいとゞもの哀れなる今宵に、さすが氣丈の光江も打しをれて様の柱に身を靠せたるまゝ見るともなし振仰ぐ空掠めて雁が ねの一列「今歸つた、誰も居ねねのか」とは何やら市郎兵衛の聲香光江思はず走り出れば正しくうの人なり、「やゝお前は親方一語に無量の情をこめて跡は嬉しさの涙なり、市郎兵衛は不思儀の意を面に浮べ「れゝ光坊かどうして此々に來て居たのだ、明石は」まづ問はるゝ兄上の情に駭き、は女心甲斐々々しく汲んですゝむる盆のぬるまゝ湯草鞋脱ももどかしげに上る市郎兵衛に引添ひて一室に入るより「何からいふて好やら言葉に盡されぬ親分のお情

け兄をはしめ、妾しまでが命ちひろひをいたしました」市郎兵衛は心にも掛す打消して「何の他人臭え禮なんぞうれはともかく明石始め盤若なんぞは歸つて來たにやあちげえねえが、別に途中でことも起らなかつたかな」「ことごころか歸り途は伊勢路をとつて參宮し江戸へ途たはつひ此はど聞けば親分一人は蹈留つていかに難義をなされたことと散々兄を責めましたに、思ふたよりも早いお歸りやつと安心いたしました、互ひに折とけ語らう中歸りくる明石に吉門口より聲高く「妹居るか、喜こぶことを聞て來たぞ」不意にがらりと襖開れば思ひも懸ぬ市郎兵衛、こは夢かと明石に盤若、左右につかと座を占めて「親分能く早く歸れたなあ」「哥々巳あ夢のやうだ、今途中で聞けば京都は慥かに無事だつたと人の話が江戸中に傳はつて皆な安心した所今日が今歸らうとは思はなんだ何せよ無事で目出度々々々、妹さだめし嬉しからう」子供の親を待得たらんが如く五尺の男愚にかへりて彼を問ひ是に答へ、しばし雜談の中に盤若は改たまつて「親分もう此上は京都で極たあの談しは隱否なしにうんといふてくれるだらうな」傍せぬ市郎兵衛は盤若の顏見まもり「吉談とは何のこと」吉はもとかしげに「親分もう忘れなすつたか、談たあ、明石園の妹御を貰ふことさ、今度は否とはいはせねえ、媒酌は水野様に今日れ頼み申してきた」市郎兵衛は膝を進めて「吉嬉しいぞ、手前の眞情もうこの上は何にもいはぬ、いかにも光坊は市郎兵衛が引取た其に喜こぶ三人の心々ものしき初夜の鐘のね今宵は愛ひの外に響きぬ。月を越て水野十郎左衛門が身分を忘れての媒介役に結んたる緣の糸、市郎兵衛が白髮の婚屋にふさはしからぬ一輪の花咲ぬ、獨寐

の床に聞わびし隅田の櫓聲曉の寢覺是れよりは淋しからずなげやりの塞所に寵の煙煤ぼらず、味噌漉に蜘蛛の巣も張らずなりけり。

第三十六席

數度の戰場に携さへて万人の血に染みし槍も鞘に納まる御代の夜は門守る犬の夢も安かるべき此頃にさても奇怪や夜毎の辻斬昨夜は芝、今宵は四ッ谷と、一夜數か所に起る注進區々にして時の町奉行は人を八方に出し惡魔の所在を探れども風の如く消ゆるに早く猶頻々として絶ねざるにはあぐね果つるばかりなり評判は江戸の八百八街に行渡りて、誰とて震ひ恐れざる者なく、夜は一町の四ッ角に寢酒買いに行くさへ憚かりて、宵寐の門深く鎖し流

石、大江戸も夜の靜けさは火の消えたるが如し。

城中の噂さも此頃はこの物語に持切るばかりにて某は昨夜友の家に酒に更しての歸るさ、立顯はれし仁王の如き大男切付けたる白刃の光目早く認めて体を開き、渡り合ひしが手練の太刀先、さしもの曲者敵しかねて卑怯にも逃去りしが跡に落せし紙片には神祇組の名を記しありしと一人が自慢話に又も一人が某がしは此程の夜、怪しき曲者に出遇ひしが、曲者はいづれも白刃を拔持ちたる四五人の群、我が立聞くとも知らずしてお頭の水野殿がもう來さうなもの、手强き奴に出合ふてはお頭ゞ居らんでは心細しとひうめいての立話し某がしが不意に小陰より躍り出しに慌ろきてか手向ひも致さずに逃失せしは弱い奴、さては此頃の辻切は彼の神祇組の所業でござるかな、語り合ふを先刻より耳傾むけて聽居

し大久保彦左衛門即乗ならずと其席へ割て入り「いや何れも今承たまはれば市中に穏やかならぬ者が徘徊いたすとなゝれは一興ぢや、老人近頃腕だめしの致さぬ爲何となく力も抜た心地、これでも昔は權現樣のれ供して長久手の戰ひには敵の剛將と聞えたる……あいやいづれも方何處へ逃さつしやる、さて〳〵腑甲要ない方々ぢやなせ老人の話しに耳貸されぬ、なにこの話しは十二三度聞たと云はゝか、さらば關が原に致さう、興に乘じて說き進む中、いつか四邊の若侍一人立ち二人立ち一人殘らずなりたるに彦左衛門舌打して「これぢやから面白うないは今の若侍共、されど今聞く水野の噂さ、義あり勇ある天晴武士の摸範、頗もしき侍とのみ思ふたに辻斬なぞする所以なし、もし風說が眞なら容易ならざる儀、天下の爲惜しけれど花を散させねばならぬ、兎に角今宵は實

否を確かめてうの上決する仕置もあらう」獨語きつゝひとり打點頭き、常の如く下城なし、邸へと立歸りしが、其夜も更けて九刻頃、彦左衛門は必利たる下郎一人を從へて態と人通りなき淋しき道を撰び牛込御門にかゝりし時先立つ下郎を呼留めつ「こりや、これなる提灯の灯を消せ訝かる下郎は主命に提灯ふッと吹消せば綾なき暗は咫尺もわかず、探るが如く行く片陰より閃めく電光さしつたりと身をかはせば力餘りて二足三足よろめき出づる一人の曲者襟首掴んで手元に引付け「曲者、何奴なれば理不盡にも暗の不意打惜くき奴めゞ、こりや灯を點い驚き騒ぐ下郎は漸やくにして點す提灯曲者にさし突くれば、彦左衛門は熟々と曲者の顏見ひしが小首傾むけて思案の体「こりや曲者、仔細を明さば命は助けて遣はさぬものでもないして汝の姓名は何と申すぞ、包み隱すに

於ては容赦はいたさぬぞ」曲者は縛付らるゝ苦しさに憚れみを乞ふが如く「拙者奴は水野十郎左衛門が家の者、主人の吩付にて新刀の試し斬に盛外いたせしばかり、他に悪意もござりませぬ、無禮の段は平に御宥免、命ばかりはお助け願ひ上げまする」彦左衛門はさてそと點頭き「なに水野の家來とな然らば猶さらこの大久保彦左衛門は存じある筈、いかに主の申付とはいへ、いはれなく人を殺めるとは言語に絶した狂氣の沙汰、此頃各所の辻斬も察する所汝等の所爲であらう、免し難き奴なれど些か仔細もあれば今宵は免し遣はす、主人にも確と申し聞いして〳〵汝の姓名は何と申すぞ」彦左衛門と聞くより曲者は大いに驚ろきし狀なりしやゝあり て恐る〳〵「大久保の御老公とも存じませず、暗とは申せ飛だ虚外主人だけは御勘便の御計らひ偏へに願ひ上まする、拙者は平、イヤ兵藏と申す下郎いかなる御咎め受くるも覺悟いたしてござりまする「いや遣て存じよりもあれば今宵は差免す、以後慎しみ居らうぞ」曲者を突放して彦左衛門悠々として家路に向へば跡に曲者仕澄したりと四方きよと〳〵窺がひしが吹鳴らす呼子の笛聲聞付けて此處彼處より立顯はるゝ同じ扮装の曲者四五人此方の曲者は進み寄りて「殿今宵は怪我の功名に勿怪の幸はひ、彼の大久保の老爺とも知らず切りかけてまんまと生擒られ名を聞れたを幸はひに水野の家來と名乘たら何と思ふたか免されましたが的切さうと思ふるに相違はござりませぬ」いふを聞くより此方の曲者「なに大久保に出會したとな、いや平吾出來し居つた、さては計畧圖に中り水野の自滅も遠くはあるまい、前祝いぢやどりやぢつて飲み明さうか」いふ聲は高坂伊織打連れ立ちて急き去れり

りの翌朝大久保達左衛門は水野十郎左衛門を訪問れてやゝ暫らくして歸りしがいかなる事や物語りし人を遠ざけたれば知るによしなけれど送り出たる水野の顔には晴れやらぬ色の浮ひたりき。

第三十七席

鬼斗つけてまで賣らんと投出せし命一つ、挙はひに釜の喰し程の疵も受けずして、徒づらに送る幾春秋夢の市郎兵衛ともいはるゝ者が喰ふて寐て安閑たる生涯面白ふもなやさても其後目覺しき働らきも爲さゞれば惜しや美事の身体痩見ねたり、腹こなしの一働らき賴まふといふ人間らしき奴は出て來ぬかと腕を撫つて嘲つ愚痴は、いつも光江がはゝと笑ひに消されて又しても我夫さん

の醉狂な以前は獨身今はお前ばかりの身体ではでざんせぬぞね聞たう、もない愚痴置んせと、何時の間にやら覺ね込みし言葉の端も女房めきて、これには市郎二の語も繼げず、花の嵐も避てや吹くらん、穏やけき春を送り迎ふる事三たび四度彼の高坂伊織は何とせし姿も見せず影を潜めてあれ程の意旨能うも堪へてこれまで手出せずに過せしよ、意地無い奴と市郎が罵しれば結句仕合せと安心の胸撫下すは光江磐若の吉はさすがに油斷なく、親分大事と心を配りぬ、さても靜けきこの頃なり、波も起たぬての淵はつひに早瀬も知らで終るべきか、心もとなき行末かな。

今日も純然の一日漸やく暮近き冬の日脚西の樣を辷りて消ゆるさゝに底冷する寒さは筑紫颪と共にさうひ來て白鷺の森に噪がしき夕鴉聲も慄しき門口を差覗く中間姿の男夢の親分は此方で

でございますか」と音なふ聲に光江は立出「はい市郎兵衛が宅は此處でございまする、して何方から……」いふをも待たず仲間は取出す書面急しげに差出して「拙者は水野から參りましたがこの書面は火急の御用事とやら、返辭は要らぬ和方同道との事でござる「何かは知らず火急の用事とは心懸り外ならぬ水野樣のお迎へ願ふは無事の用事であれかし」と何事にも心騷がするは無理ならぬかゝる俠客を夫とする女房の心遣ひいろ〳〵と夫の前、吉凶は知らぬ氣づかはしの書束さし置きて「今水野樣から仲間衆がござられて何か火急の御用事とやら、このお手紙でござりまする」夕方の詫しさを退屈のごろ寐、瓦破と起きて書面取上げ封切てさつと一通り讀終るや寄する眉根の八の字も案じずには居られぬ光江が心配夫の傍に摺寄りて「もしね、何やらむづかしい其顔付、はて氣

がゝりな用事の仔細早う聞せて下さりませ」云はれても聞ねぬやうに拱ねく腕に吐く吐息、聽ては事もなげに笑顏つくりて「いや何ぢや案じる何ぢやない、久々の無沙汰に逢ふて話しのしたいと云ふ先樣からの御催促ぢや鳥渡出でくる程に着物出してれくりやれ長話しの興づいて夜は遲ふなるかも知れぬ、案じる事ぢやないわ遲ふも戻つて來る程に留守賴んだぞ先潛られて光江は强て問ふ汐もなく問ふたからが、いはねが毎時の常、はて案じる事でなければ好いがと潛々起て取出す外着一揃へ市郎兵衛忙がはしく着終りて「それでは行てくるぞ淋しうとも今に吉か證ぞ來う程に遲ふとも跡賴む」立出る表口「いや迎への衆お待遠でござつた夜風身に泌む薄暗の空の何方かまだ鎭まらぬ夕鴉の騷ぎ、けたゝましく鳴立れば市郎兵衛屹と空仰ぎて輕き舌打「エ、因起でもね

へ悲忌々しい鵺鳴ちや。

第三十八席

絹燈の影しめやかに四邊を照らして、膝突合す主客の物語りの外は雨戸に觸るゝ木枯の風、夜氣森然として座に迫るもの寒さ主は寄と咳きして輕く膝搖がせ「市郎段々の異見の程、余が何として悪う聞うずしたがかく成行くも時世ぢや返す〳〵殘念なは高坂如き偏子に賣られた手落ぢや、自体近頃の彼が振舞合点行かずと思ふたが、よもかはせの課せうとは思はなんだ口惜にしは山々ぢやが何事も諦め一つ後は何分魂い頼むは足下、犬死の上石碑に泥を塗れては魄白浮む瀬も無いぞよ、流石に涙は飜さねど身に泌み入るうるみ聲市郎、兵衛は拳固めて無言にさし俯むく稍、ありて顔

を擧げ、決心の色見ゆるばかり言葉凛々しく「ぴやてればかりは拙者の何してもお言葉に從がはれなせぬ縁がる事の起りから見ても皆拙者が關係、一時の御迷惑懸けたのでさへあゝ濟まぬと存じたにそれからお身の大事とお成なされたとあつて、何うしで傍觀が出來申さう、うれこそ男の顔の潰れ時ぢや、何と仰せても其お咎め拙者が身一つに引受てせめては日頃の御恩顧に報ゐよふなら、たとへこの身体は八裂にせらるゝとも、日本晴の好い心持、指を咄ゐて傍で見て居れなんぞゝ其儀は何として我慢のなり申さうこれのみは是非にお任せの願ひなする」頭かし難き殊勝の決心、水野十郎左衛門殿にも恐れぬ眼を度叩かして靜かに手もて押留むるが如く「はゝ何時もながら潔きよき其言葉嬉しう思ふぞよさりながら市郎兵衛能う思ふても見い、此度のお咎め思へば我に落

度のないでもない、よしやそれは何れにせよ、大久保の老人から懇々の申聞もあつたぢや存意も殘る所なく老人の耳には入れて置いた、今は思ひ殘す所もなく、只台命の下るを待つばかり、見るも苦しい近頃の士風の頽廢れには好い見せしめ、我が切腹武士の手本に美事に腹割裂いて世の眠覺さしてくれうと既に覺悟極たる今となつて武士の意地れ上から助けるから長らへいとあつても便々と生延らるゝものか、市郎にも似合はぬ其考がへが付かさる事もあるまい又追腹切らうとは猶さら無益の犬死さては高坂を何とする一旦の命を長らへて我亡き後の無念を晴して呉やるが生々の喜こびぢや慈しいに足下が差出は結句世間の物笑ひこの我まで死場失なふ恥辱となる死ぬ時に死なねば死に勝る恥あると世の言葉にもあるでは無いか、決して其志ざしだけは無用に

しやれ諭すが如く淳々と陳る言葉には市郎兵衛感々感激の聲擡りて「ぢやと申して此ま丶拙者いかで引込で居られませうぞ、慮外ながら上のれ答めから第一意に落ちぬ御沙汰餘りと申せば御無態と存じまする大久保様は名智の殿一應は御穏便のお取做を拙者からお願ひ申さば或ひはお聞届けに成らうも知れませぬこれば つかりは拙者にれ任せ下さりませ、飽まで身命を賭しても救はんとする嬉しき心根、哀れならぬにあらざれど、水野は態と聲荒く「はてさて聞分なしかくまで言をわけて申すにその耳には入らざるか、今宵態々呼びてまで打明たる話し致すに、まだとやこう我言葉を遮ぎるとは、いひ甲斐なき愚かしさ、もう此上は何事もいひはせぬ、何とでも勝手にいたせ、我は又昔のまゝの市郎とは思はぬぞ、吃と云はれて市郎兵衛、早やいひ出ん繼穂もなく、涙を呑で俯

首れば十郎左衛門更に面を和らげ「こりや市郎兵衛其方が名の夢の浮世、いづれは死ぬる命ぢやにさまで力落すには及ばぬわ、どりや今生の別れ名殘の一盞快ろよう酌で歸りやれ、玄作用意が好くば其酒これへ」聲の下より襖開きて平伏す老臣の玄作先立つべき身はかくと壯健かに主は思はぬ御咎め受けて、我より先に死を急ぐとは世にもかゝる頻倒事のあるべきか、玄作は市郎兵衛と顏見合はして互ひに言葉もなく愁然と酌かはす杯の巡るに早く夜は更けぬ待たぬ明日を急がすが如き五更の鐘、音も冴へて響き來ぬ。

第三十九席

徳川の初代に花を飾りし神祇組伊達の兩刀犬追ふ威しともなら

ぬ、弱武士の中にいさゝか、武士の面目を發輝せんと力めたりしが果は徒づらに町人をして膽冷させしのみの事となり其名を驅る猪武士が狼籍の振舞、士人の眉を顰めしめてついに公義の聽に達し水野十郎左衛門外二三の頭領は犧牲となつて死を賜はりし末路ぞさても哀れなる

獨り小蔭に滿足の膝叩いてわが望み成りぬと喜こびの祝宴開きこれよりはわが世界、膽死して梟が羽を延す運が向いたと嘗くは高坂伊織なりける。

水野十郎左衛門が三千の乾兒に代り潔ぎよくも罪を受けたるに特別の思召を以て明日は切腹といふその前夜なりけり、閉門の青竹殿しき中を潛りて不淨口より人目を忍ぶ一人の男出でぬ内より送り出しは潛めく聲、「市郎さらばぢやゞ、深夜の事といひ途中

は物騒氣を注て參れ、名殘惜げに聲音は紛ふ方なき水野十郎左衛門、市郎兵衛地へに地へし血の涙、堪へぬが如くせき出るをぐつと押へて恭々しう大地に雨手を突きて「身に餘つたるお情けの段々市郎兵衛申上る言葉もございませぬ、先程よりのお論しは能く腹に入りましてございまする、もう此上は何で違背の仕まつるべき只御亡き跡の御懇情しは必ず務めるでございませう、香華に代へて御墓前に手向くるもの草葉の陰に篤と御覽下さうませ、あゝあさくも浮世とは申せ、云はい數ならぬ私くしからさま〳〵の御難義、引起した上、果が今度の御生害お身代りに立つ事もならぬ私くしの命の薬所生て居る甲斐がございませうや、御推察の下さりませ」涙に曇る聲を搾つて肺腑より出る市郎兵衛が一述懷、門の内なる、十郎左衛門、鐵石ならぬこれも斷腸の思ひ稍ありて言葉を改た

め「市郎兵衛何も申すな、これといふも前世に定まる緣、うの天晴なる俠骨、安う賣るなよ、死場所を能う選べ、余が手本ぢやにゆめ輕々しい振舞に出でわが折角の心盡しを他に致すなよ、好いか名殘は盡きぬ、人目にかゝらば一大事早う行け」溫言かくの如き人を世は何で鬼の水野と恐るゝぞや、市郎兵衛は大地に俯伏て思はずはら〳〵と血の涙だ靜かに閉る潜戸の音にはつとばかりに膝行出で「さ、さらばでございまする潜戸は閉切られても猶其人は立盡すかなつかしき咳ぶきの聲あり市郎兵衛は衣の塵打拂ひて悄然として起上りしが足は怪しく地に吸付く如く去り難き別れの境、塀一重がこの世を限る冥府の關腕拱ぬきて歩みも重く來かゝる水野の居敷の角、待設けたるかばら〳〵と立顯はるゝ五六人の曲者白刃の襖を造つて取圍めば、不意ながらも動せぬ市郎兵衛「エ

、又しても若蛔い蛔虫今は面倒だ出直せッ」白及の下を潜つて二三人投げ退けつ、逸早く暇に姿を消しぬ。

第四十席

さしも大江戸に聽ろきし神祇組の頭領水野十郎左衛門と歌はれしも、今は一基の碑と化して、流石に香華は絶ねせされど、哀れは夕暮の木枯落葉さろふ墓前の淋しさは誰が今昔の感に堪ゆべき盛名は朝日に向ふ霜の消えて崩るゝ神祇組の末路、うの流れを濁す雷神組のみ、世を思ふがまゝに振舞ひて潜横至らざる無きも何とせしやらんこれを挫かねばならぬ夢の市郎兵衛さん今は世を忘れたるものゝ如く白髯の詫住居に引籠りて、世間には顔も出さず何事ぞや今を盛りの四十男が、佛の前に珠數玩弄りて殊勝らしき

讀經の聲、時雨の窓を漏れて、鉦の音月の夕に響くを聞けば誰かその心ろ根の底酌みて泣かざらんや。

今日も朝がけに水野が墓詣でして歸りてよりも佛三昧、時は正月の七草も明日といふ六日なるに、毎時とは逆ひ、世間並の祝ひは祀い、乾兒衆の前もあるに、酒なと飲で陽氣にさんせと女房が諫めも耳にかけずさても一度無常に誘はれし夢の市郎兵衛死灰再たび燃ゆる勢ひも失たるかと、磐若の吉さへあきるゝばかり、夜に入りては猶さら陰氣くさき一室に、燈火の火影に背きて、つく然たる市郎兵衛心がらか痩見ゆる影法師、跳々跳めて光江も同じ嘆きの太息、聞ねてか市郎兵衛、やをら後ろに向かへりて常になく言葉も改たまり「奴共はまだ歸つて來ねねと見ねるな話しかけられて光江は心嬉しく「先刻まで三四人見ねていでさんしたが何處へ

行たやら何をいふにも正月の事、吉原へでも繰込んだのでござんすう「ツム、左樣ぢやろ、時になー元日早々明石の兄貴から年始を受けたが俺は何分出懸るのが太儀ぢや、知ての通りの出不性、別に何とも思ふては居まいなれどもうれでは餘り義理が惡い丁度今夜は閉ではあるしお前代理に行てきてくれ、歸りが氣遣はれるなら一晩泊つたッてかまやアしない。機嫌好けなる夫のけしき光江はいぶ〻胸晴て「何のいな、兄さんの處なんぞ年始に行くは不要ぬ義理殊に用が多い最中に行けば却つて兄さんに叱られるわいな、その樣な氣を遣はずとちと氣晴しに酒なと飲で浮れさんせ。夫思ひの女房が言葉打消して市郎兵衛「いやさうぢやない、義理は義理ぢやそれに久々の骨休め明日は兄貴を强請て芝居でも見に行たが好い、守守は町郎共も居るから氣とる事はないわさ、いへど光江は

行かん心もなく芝居なんど見たらもない元日早々閑さうに家を明て出歩きがなるものぢいな市郎兵衛は押かへして「いやそれ、ばかりではない明石には少し用事もあるのぢや委細は手紙に書てやるうれを持て鳥渡行て來てくれ口で話してもわかる事に事なしい手紙とは何な用事か知らねどもうの使ひに行けといふな否といふ譯にも行かず氣は進まねど立上りて「用がゐるといふなら、一走り行て來ますわいな本所までは僅かな道遲ふならぬ內直歸て來う程に、うんなら手紙早う書んせ、光江が立て身繕ひする間に市郎兵衛は何やらさらく〻と書終りておもはず落す一平見咎められては一大事と周章て密と押拭ひ手紙を光江に手渡しつ門口まで送り出「夜道ぢやに氣を付けて行きやれ何と、やら澄ま ぬ胸騒きに光江は後を見かへりながら慌ならなくに急ぎ足川風

寒く千鳥鳴く隅田の堤を小稜きりゝと引き上げて一散走しりにゆきぬ、

第四十一席

光江の出行きし後、市郎兵衛は静かに佛前に唱名の聲も毎になく厳かに、暫らくは立も得やらず手向たる裳裾風なきに落ちて、ばさりと壁に散り敷きたる藏ろきて見上げたる市郎兵衛が顔には淋しき笑の見ねたりしが、やをら立上りて納戸の中より取出す秘蔵の一刀長らく腰を離しつるこの日頃覺えの業物さぞや嘸ちつらん、いざや久々の御見に入らばやといひたげに鞘を拂ふてヂッと見詰、再たび鞘に納めて腰に手挾み、何か心に點頭きて行燈の火掻き立てさら〳〵と書終りし一通傍にさし置きて、今は思ひ置く事

なしとばかりに立出んとする出合頭、戸を引明るも荒々しく飛込だるは磐若の吉、「お、親分大事が起つたぞ。呼はる聲も息せきと平常ならぬ血相に、市郎兵衛は叱るが如く「大事とは何事ぞや、毎にない周章やう、ゐい氣を静めて話さんかいいはれて吉は水瓶の水一口漸く嚥ぐ心を静め「オヽ親分か毎時と違つて今夜の大事落着てゐるところぢやないぞ、さあ聞なせい、水野様が亡なつてから邪魔拂ひでもしたやうに威張くさるは彼の雷神組、高坂始め乾兒の奴等この廣い江戸を自分ばかりの天下のやうな顔して見てもゐられぬ、乱暴狼藉、私や嘸が立て堪らねゐが肝腎の親分はいつもにねゐ、引込思案、何をいふても知らぬ顔でござるので、此方も我慢に我慢をしたが今夜といふ今夜は獣つちやァ居られますめゐせ事といふなア外でもねゐ今夜家の、奴五六人と一緒に繰り込んだ大

門口、例の厄病神の雷神組の奴等夢の身内と知てか知いでか何でもないのに喧嘩を吹掛け聞てゐられぬ悪口、雑言、私ちア逃る乾兒を鎮め正月早々血を見るも穏やかでねねと當り障らず引上ると好い氣になつて附上り、猶も執念き無法の振舞、乾兒の奴等はいくら抑へても勘忍しきれず到々喧嘩となりやしたわ私ちア後も氣にかゝるが外の時でもねね、親分の勘弁中一足飛に注進に來やしたがして、親分の覺悟の程何とでざんす、早く聞してれ吳なせねこういふ内も心が急く決心しておくんなせへ、先の程より默然と聞ゐたる市郎兵衛この時憤然たる怒を起し、「よしその喧嘩俺も出る、して其中には高坂伊織も居るのだな、思ひ設けぬ市郎兵衛が言葉凛然たる其意氣に昔の親分に立かへりしかと盤若の吉は躍り上りて勇み立「親分がうの決心なら私しはじめ乾兒までぜん

なに氣が勇むか知れやあしねね、いかにも伊織は居る所ろか、この喧嘩の帳本人さ「うれ聞て安心した、實は吉手前がそんなにいはずとも今夜は我から打入て當の敵の高坂奴、美事討取るれのつもりよ、光江は先刻離縁して實家へ歸してしまつたからにやアもう誰に遠慮もねねこの腕の續く限りは吉原に屍の山を築てくれるわ」いふより早く土間にひらりと飛下りて「吉續けッ」疾風の如く駆け出す後に引添ふて盤若の吉も息を限りに走りぬ、

第四十二席

何とやらん心にかゝる夫の樣子仔細あらん、この手紙兄に見せなば事は分ると他目も振らぬ小走りにはやくも兄志賀之助の家に到り着けば家の中には朋輩の誰彼朝より來りて祝ひの酒にい

つれも酔臥して前後もわかぬ兄の体二度三度揺動かしても起きるけしきもあらざるに、エヽ人の氣も知らいで呑氣さうなこの寳寐こーれ兄さんね、兄さんね急用でござんすわね呼起されて漸やく目を覺したる志賀之助妹と見るより訝かりながら起直り「汝や光江ちやないか何か用でもあつて來たのか、光江は急がはしく懐中せし市郎兵衛が書狀さし出して「何の用かは知ぬけれど何でも今夜の中にこの手紙兄さんに持て行けと態々出ては來たなれど、此頃からの家の人の變つた樣子、どう考へても腑に落ちずうれに途々の胸騒ぎ何か譯のある手紙早う明て見て讀で見てくださんせ志賀之助は小首傾むけ「はて何事が起つたやら用のあるべき心當りもないが……」いひつゝ開く封の中よりはらりと落つる一札はこはうもいかに光江の離縁狀、餘りの事に兄弟は顔見

合はして言葉も出ず、呆れ果てゐたりしが、漸やうにして光江は涙だの下に「ねヽこれ見た事かない氣にかゝつたも道理何の落度した覺えもないに唐突にこの去狀妾は厭ぢや何で阿容々々この去狀受取うかね、はやう兄さん行てくだされ、行て詫してくださんせおろ〳〵聲に兄にせがめば志賀之助は腕拱ぬきて思案の体光江はひとり氣を焦燥ち「これ兄さんとした事が考へる事もいらぬではないかいな、ちやつと行てうの譯聞て來て下され、うれにしても餘りといへば無情ないは家の人、妾には一言の譯もいはいで欺して家を追ひ出すとは男らしうもない仕打、これ兄さん早う不承をいふて來て下さんせ」理わりせめたる女の情志賀之助は猶考へに沈みしがやがて組たる腕を解き「これ妹汝や出懸の樣子何にも訝しいと思ふた事はないか、親分に限つて譯もなく女

房を追出す人ではない、これには深い仔細が無うてはかなはぬ、もしや万一……」と云ひさして妹の顔今さら見れば哀れの増り・「よし、よし兎にも角にもこれから俺と一緒に家へ出懸けて見やう、逢ふて話せば思ひの外早く話しがわかるも知れぬ、どりや島渡行て來うかな、志賀は立て身繕ろひし光江を伴なひ家を立出向島さして急ぎ足來かゝる門口人のゐるけしきもなく明放したる戸に燈火の光も漏れず雨人はいとゞ怪しみながら光江は勝手知れる我家の内消ねし行燈に早く火を燭せば志賀は四邊を見廻し〳〵て浮と目に入る傍への一通手に取上げて讀むや否や「やゝッ失策たみ光江、たつた一足後れたわ」いひも敢ねず駆け出る兄に、様子尋ねん追もなく後るゝまじと追かけたり、

第四十三席

往さきるさの人足、この大門の開けしより絶ねたる事なく曉の風粉膩の香を送りて見かへり柳の靡き定さらず大江戸の夜の賑はひはこゝに集まりて草本の眠るといふ亞滿もこの廓はかりは夜を晝なる三味の音太鼓の音、不景氣の風は何處を吹くやと、吹す烟草の烟の末にも知られぬが習ひなり、何事ぞこの不夜城の別天地にたゞならぬ物音叫び聲ぞつと一雪崩打て素見ぞめきの幾群周章惑ひて大川口を出で去りし跡は大門はたと鎖して天女拜さん雲の通ひ路、こゝに途絶たる奇代の出來事大門口に立集ふ見物が口々に呼く取沙汰聞けば雷神組と夢の乾兒が命を取り遣り喧嘩騒ぎ降て沸れる俄かの騒動、あたら正月早々からこの吉原を修羅

場にして背中合せの極飾りに血沙の雨を降りかけんず前代未聞の椿事とぞ聞ゐし「どい、退た、退た」と雷の落らかゝる如き勢ひにて見物の中押排けつ章駄天の如く驅け付けたる夢の市郎兵衛、續いて後に槃若の吉廢、今宵が晴なる勝負の運定め凛然たる威風四邊を排ひて美事の武者振見物は又もやゝよみを造つて大門口に押寄せたり。

鎖されたる大門に市郎兵衛は暫し猶豫て槃若の吉と顔見合せしが吉は心ろ得て門の扉を續け打開けよ、開けよと呼はれゝ開くるけしきも見ゐざるに市郎兵衛は氣を焦燥ち身を躍らすよと見ゐたるが早くも大門の上に攀ぢ登りて屹と下をば瞰しつ四方に響く大音聲「やあ遠からん者は音にも聞け夢の市郎兵衛が最後の死花、この吉原に咲してくれるも、傲慢無禮の雷靜組たとへ何百人

あらうともこの市郎兵衛が手の内に一人も遁す事ではないぞの他の者は邪魔立すな、怪我して後で後悔するなッ、いふより早く飛降れば吉も續いて内に飛び入り、制せんとするを突拂ひ喧嘩の場所へと驅付たり。

素破喧嘩と聞付るや何處ともなく馳せ集まりし市郎が乾兒の十五六人中に取籠めて雷神組は高坂伊織が指圖の下にいづれも必死に切り結べど命惜なる敵手の鋭ぎさに一度は負色立て見えたるが多勢を頼みに雷神組、四方より取圍みて隙間もなく切かゝる怪我人さへも多く出で既は危ふく見ゐし折から後ろの方に聲あり て珍らしや高坂伊織、性懲もなく無用の碗立市郎兵衛が手並を知ぬか知らぬとあらば相手せう片端から蒐つて來いいふより早く割つて入りしは、見紛ふべくもあらぬ夢の市郎兵衛、高坂始め配

下の者市郎兵衛と聞くよりもいひ合さねどたぢ〳〵と二足三足引退ぞきしが一人と見て高坂が擬勢をつくりて勵ますにもうてうなつては百年目、まづ市郎兵衛から片付よ」と群々と襲ひかゝるを事ともせず、二人三人斬り倒す當り難き太刀風に誰向はん者もなく後込む後に樂若の吉名乘かけて切り入れば、こは敵はじと大門口に逃れ出んとする者共には日もくれず目指す敵は高坂伊織と市郎兵衛は獅子奮迅の勢ひにて伊織目懸て飛びかゝる勇氣の程に高坂は卑怯にも逃出んとするを「やあ卑怯なッ、今となつて逃らうとて大門は閉つてゐるぞ、武士らしう尋常の勝負をせい、逃るとて逃がさうか」いはれて流石に踏止まり太刀翳して身構へつゝあ素町人の分際にて武士に向つて手向ひせうとは身の程知らぬ不埒な奴め、もう此上は容赦はせぬ、余が一命を取つてくれうぞ」切

端詰りし廣言に市郎兵衛は呵々と打笑ひ「れゝ能ういふた上野の山でも取る命を今まで助けて置いた恩をも忘れ、今となつて其廣言市郎が刀の利味見よ」切りかゝる伊織が太刀先輕く受流して無念重なる市郎兵衛が冴たる腕に精氣籠りて電光石火と打込むを伊織も必死に防ぎしがいかで市郎兵衛の勝しき太刀風に敵すべき「オッと喫いて切下す最後の一刀、受損じて肩先深く切下られ其場に堂と打倒るれば起しもたてずのし懸りて止めを刺したる折りからに樂若の吉も平吾を打果して市郎兵衛の傍に駆せ來り「お親分これで日頃の思ひも晴れた、もう此上は長居は無用片時も早く落なせね、私や一足跡に殘り乾兒の敵等を繼めて行く」市郎兵衛は靜かに刀を鞘に納め「どうで人を殺めたからには活て居られぬ此身体、だが俺は少し用があるうれ濟すまでは命が入用跡は

自分頼んだぞ」樂若の吉は意氣決然として「親分心配なせえます、萬事は私ちが引受やした樂若の言葉を後ろに聞きて市郎兵衛は早くも水道尻より何處へか姿を隱しぬ。

一足遠ひに押寄せし取手の役人樂若を一人取圍みて逃さじものをと心を配れば樂若の吉はかねて覺悟の事といひ悠々として驚げる色もなく「喧嘩の本人は私ちでございます、常にお縄受ける覺悟れて手向ひは仕まつりませぬ、征容として縛に就ける樂若の吉は罪を一身に負ひて奉行所へは引かれぬ。

第四十四席

松の梢に吼し木枯の風も、深けては靜げきこゝ三田巧雲寺の境内、霜を踏む足音しと〳〵と聞ねしが立顯はるゝ一人の人影四方を窺ひつゝ、裏手の墓地に忍び入りぬ。夜は殊さらものすさまじき墓地の奥深く、探り入りたる彼の曲者は、只ある墓前に恭しく跪づきて、暫らくは默然として、言葉もなしにさし俯きしが、漸うにして首を擡げ活たる人に物云ふ如く、「この數ならぬ市郎兵衛を、人と思して御生前の御恩の段々、御恩返しの仕つらぬに、高坂奴に陷ゐれられて、無念の御最後、それも元はといへばこの市郎から、何とお詫を申さうやら、此身の立つ瀬もござらぬ仕誼、御怨敵の高坂は今宵首尾能く打果しましたが、せめてもの御念晴し、草葉の陰の御靈市郎が寸志を御嘉納くだされ、委細の樣子は押付冥土で、お話申すでござりませう。いひ終りて懐肌脱ぎ刀の鞘を拂つて袂にしかと握り持ち、南無阿彌陀の唱名靜かに口の中に唱へて横腹深く突立んとする一刹那轉ぶが如く馳せ寄るや双の手に取縋りて「う、恨